事務局用

山名

第四号

山名豊国寿像（京都花園妙心寺東林院蔵）大阪市立美術館寄託中

東林院殿徹菴高公大居士壽像

吾國本朝之山陰道但陽者世々武域之金城也惟夫　公之家系既但陽山名之的裔而天性勇気過人此故弱冠而任因州太守以累樹功業矣雖然國未置泰山蒸民時々勞枕干日居于月諸蝨賊内訌起蠭起外入　公丁斯辰躬自擇戈装旗内訌者告從卒以治之外人者命突将以退之誠前軍利鏃穿骨驚沙入而後兵積雪波脛堅氷在鎖日光寒号草短月色苦号霜白傷心慘目鳴呼時那命那實是累年之間寄身鋒刃百戰百勝介冑被霑汗壘以固峭函東西之二重城以守秦漢南北之万里天夫幸之者平路致邦於堯舜萬民悉得太平路鋒猊之狻連鎖之甲中興元勲猶克世其家擧譽於後代尽善□美矣可謂威安太守韓世忠□加旃　公文武之暇見宗風千千里入吾山之三友堂頭　直指老禪室透徹祖師幾許話頭放厥平素觀飛□落葉之無常感長庚残月之頽齡耳今也於三友之旧址創建丈室作菩提道場號曰東林院即延師之寵弟守塔之團蒲夜静曲机日永春風吹掃除工夫床則牡丹花富輝天寧老師之德色秋露滴湿却定僧衣則蒸□葉飜發維摩居士之道香□棟之朝飛也朱簾之暮捲也恵日梅花方丈翠徴槿花方丈僉以直下風者也營皇宋　神宗帝元豊三年有旨改廬山舊房命住常徳禪師住持之從云東林禪席大盛哉一日東坡居士敲其室忽然悟入投機偈云溪声則是廣長舌山色豈非淸淨身矣今以并案則　三友老禪乃百年大士東林常徳師乎　高公居士廼七世逃禪東坡蘇知識乎古今無二路吁宜哉　野偈一篇頌以為厥壽像贊詞云　看々

東林門下一宗猷　七世坡翁獨拔尤

淸淨法身曾不隱　溪聲山色舊時秋

慶長十己抄冬日　前花園鐵山老拙暮齡七十四涉□洛下

山名

題字

村岡藩主山名家第十四世
全国山名氏一族会　総裁
山名晴彦

山名

平成十年三月刊／第4号目次

伯耆山名氏と禅宗寺院……日置粂左ヱ門…4
全国山名氏一族会相談役

山名氏楞厳禅寺追想……冷泉為人…10
大手前女子大学教授

九日市城・此隅山城・有子山城……西尾孝昌…14
兵庫県立八鹿高等学校教諭　郷土史　城郭研究家

山名源七郎豊通大應寺に眠る……山根幸恵…34

〝戦国〟を生き抜いた最後の守護……鷲見貞雄…44
——運命に翻弄された山名豊国——
作家

伯耆山名一族の城館遺跡……吉田浅雄…74
郷土史　城郭研究家
研究会報告……山名章…96
山名氏史料調査研究会
口絵写真紹介……山名章…98
執筆者紹介…99
編集後記…100

伯耆山名氏と禅宗寺院

日置　粂左ヱ門

はじめに

室町時代の伯耆山名家にかかわる史跡、史料についてみると、東伯耆では倉吉市に光孝寺、同、大谷保国寺がある。曹洞宗定光寺には、県文化財に指定されている定光寺文書中に山名関係古文書がある。

一方、西伯耆では、久坂瑞仙寺に山名家の由緒を伝える文書が多く所蔵されている。本稿では、伯耆の禅宗寺院や伯耆山名家にかかる資料の一部をとりあげ紹介してみたい。

一　伯耆山名氏の拠点と光孝寺

南北朝初期に山名氏が本拠地としたのは伯耆国であった。その時期は、建武四年から貞和四年（一三三七―四八）にいたる十二か年の間で、伯耆国を拠点としながら丹波・若狭三国に勢力を拡大していった。

このころの守護の居館（守護所）をとりあげている『伯耆民談記』に、山名時氏の拠点として国府川筋の久米郡田内城（現倉吉市巌城）を挙げ、田内村に侍町・寺院が多くあったという伝えを記している。

中世の城下の一端を伝えるに、国府川の川底から「屋作ノ柱」や「井」（井戸）、「鍛冶ノ職具」が出土するといい、「久米・河村二郡内古蹟取調書」には、「見日町」について次のように記す。

見日町ハ最小ノ市街ト雖モ、内海中ノ一小都会ナリ

ほかに、殿町・大町・花町が知られる。この地域は、小鴨川と河村郡から流れくだる竹田川の合流点であり、ここに内海が形成されており、水運交通に至便の地であったと思われる。

田内城から南西約二キロの地にある打吹城（現倉吉市）は時氏の子師義の築城と伝えられる。

室町幕府が禅宗寺院の位を定めたものに、五山・十刹・諸山という制度があり、地方の禅寺にあっては諸山になることによって官寺としての名誉が得られる。この制度によって幕府に統制された禅宗を五山派というが、臨済宗が中心となっていた。

栄西の弟子で京都東山に東福寺を開いた円爾弁円は、五山派の僧である。この弟子の一人で備中国の宝福寺を根拠地として美作、伯耆に進出してきた南海宝洲は文和・延文（一三五二～六〇）のころ伯耆守護山名時氏の保護をうけて、伯耆では光孝寺を開いたといわれる。伯耆光孝寺は、永享六年（一四三四）六月二日より前に十刹に列せられている。

光孝寺は、光孝報恩禅寺といい、山号は大雄山、開山は南海宝洲で開基は山名時氏である。位置は鳥取県倉吉市にあったが、現在では廃寺となっている。伝山名時氏の墓基は、市内の山名寺（曹洞宗）に移されている。

二　惟高妙安と保国寺

伯耆守護職は時氏からその子師義、弟時義を経て山名氏之に継承される。

伯州山名氏についての系譜は、京都相国寺の光源院文書のうち、「伯州山名代々次第」に記されているが、「山名系図」のうちには詳しくは記されていないようである。

「代々次第」の筆者については、惟高妙安の記した保国寺由緒などと比較してみるに、妙安の手になる文書のようにみえる。

保国寺由緒は、天文一〇年（一五四一）六月九日付けの文書で、大谷保国寺の由緒を記したものである。保国寺の開山を桂昌院といい、伯耆守護山名氏之（霊光院殿）の母である。また、保国寺の創建の時期は室町幕府三代将軍の足利義満の治世と記されている。

この保国寺は山名氏之の後継者の伯耆守護

山名政之の時に、京都相国寺の塔頭広徳軒の瀑岩（妙安の師）に寄付されたので、広徳軒末となっていたのであろう。

大谷保国寺の遺跡は不詳であるが、現在の倉吉市大谷の地と推定される。その後、国分寺・四王寺の両寺が伯耆守護山名澄之から妙安に寄付されたという。

妙安は、字惟高、江州の人で久我氏とも伝えている。瀑岩等紳の法をついだ。はじめに妙心寺に入ったが、のち相国寺光源院（もと広徳軒）の瀑岩に従い、また伯耆の山名氏に請ぜられて伯耆・出雲に三〇年の間とどまり、その間戦国大名尼子氏とも師檀関係を結び、伯耆の護国寺（保国寺か）・海蔵寺に住したといわれる。

妙安は、学僧景徐周麟に師事し、梅雲承意、月翁寿桂らにも従って外典を学んだという。

伯耆山名氏に招かれて伯耆・出雲に三〇年の長きに及んで居住したというから、その間に、伯耆山名家の人々や伯耆国人にも文芸などの面において強い影響を与えたと考えられる。

妙安は、天文九年（一五四〇）五月一〇日上洛し、帰洛後は光源院はじめ、慈照、鹿苑相国、南禅など諸寺を歴住した。従って、伯耆大谷保国寺にかかわる文書は京都相国寺の光源院に伝来したのであり、これによって中世後期の伯耆の情況を知ることができる。

東伯耆における山名氏にかかわる古文書は、倉吉市和田定光寺に現蔵されており、応永二四年九月二二日付の山名氏之寄進状他五通があり重要である。鳥取県保護文化財に指定されている。

三　瑞仙寺と山名家文書

瑞仙寺は米子市日下の集落の南方にある。ここは、佐陀川北岸の大山原野に続く微高地が展開、中世には中間庄（二宮庄）のうちと考えられている。

瑞仙寺は久坂山と号し、曹洞宗。本尊は聖観音である。現在では米子市内寺町にある同

一山号、同一名の瑞仙寺と区分するために、久坂瑞仙寺と通称されている。瑞仙寺由緒によれば、天仁元年（一一〇八）平正盛によって出雲で誅殺された源義親の菩提を弔うため、久坂の南東の山地に一寺が建立され、大山寺支配下の天台宗寺院であったが、衰微していたといわれている。

その後、永享一一年（一四三九）土豪真野兵部少輔重成は、米子円福寺を開いた天海希曇の弟子竺翁仲仙を能登の総持寺から伯耆へ招いて、瑞仙寺を中興したといわれる。（同由緒書）『伯耆志』では、開山は竺翁、開檀を山名兵部少輔教之と記している。同書に、「山名相模守源教之位牌」瑞仙院相州瑞光大禅定門とみえるが、「伯州山名代々次第」では教之は「禅栖院殿寿嶽源崇大禅定門」と記されている。

瑞仙寺文書によると、「円福寺並瑞仙院」（山名教之書下）のように瑞仙院とみえているが、寛正元年（一四六〇）二月吉日付けの真野重成同宗鎮、瑞仙寺竺翁連署の証状には、瑞仙寺とみえている。従って、この頃までに瑞仙寺の称が確立したと思われる。

瑞仙寺現蔵の中世文書は三一点であり、鳥取県内に伝来する文書群では特記されるものである。この中、山名家に関する文書は一六通を数える。これらの文書を様式（書式）の上からみると、書下（かきくだし）、書状、寄進状、禁制などがみられる。

文書の発給者は山名教之をはじめ、後継者豊之、政之、尚之、これに続く澄之らの伯州山名の歴代の守護をはじめ、一族の元之、之弘発給の文書も伝来している。

中世の文書はふつう佑筆書きのものが大部分であるが、発給者は文書の署名の下に自署（花押）を据えるから、原文書である瑞仙寺文書によって、当代の守護の花押を実際に見ることができる。

次に、山名教之の書下を示してみると、

伯耆国久坂村円福寺并瑞仙寺末寺領以下、御教書公用等段銭・徳銭・棟別大小諸公事、所奉免除也、若為子孫有背此旨者、可為不孝也、然間弥専勤行所可被全執務之状如件、

文正元年七月廿六日　教之（山名）（花押）

住　持

（瑞仙寺現蔵）

室町時代になると、守護が管国内に、直接的な意志伝達法によって、職務の執行を命じたり、経済的な収益を認めたりするようになるが、このような文書を書下という。

本文書は、伯耆守護山名教之が瑞仙寺領に経済的特権（段銭・棟別銭・大小諸公事のような、当代の諸負担を免除する）を与えた文書である。

今日伝来している瑞仙寺領についての寄進状には、寺領の在所は不詳であるが、『伯耆志』所収の山名豊興書下では久坂村内寺領七〇石とみえる。永正一八年（一五二一）には、会見都内の花松河原、今井手河原（現西伯町）の所領が寄進されている。

おわりに

中世伯耆地方における臨済宗の禅院は、今日では、記録の上で確かめ得るところであるが、すでに江戸時代に遺跡としてその伝承を伝えるにとどまっている。記録のうちで、光孝寺、保国寺のほかに小林寺（『伯耆民談記』）、会下寺（『玉塵』）も知られる。

中世の国分寺、四王寺は、現在では曹洞宗国分寺として寺号を伝えている。

近年、倉吉市教委による「上養水遺跡」の発掘調査報告によると、建物の遺構、青磁などの陶磁器片が出土し、一四世紀の瓦片も発見された。田内城跡に隣接する地域であり注目されている。近世の瑞仙寺（曹洞宗）は、鳥取藩から寛永一〇年（一六三三）寺領の折紙を与えられ、会見第二四番札所としてしられている。

（参考）

藤岡大拙『島根地方史論攷』
今枝愛真『中世禅宗史の研究』
『新編倉吉市史　中世近世編』

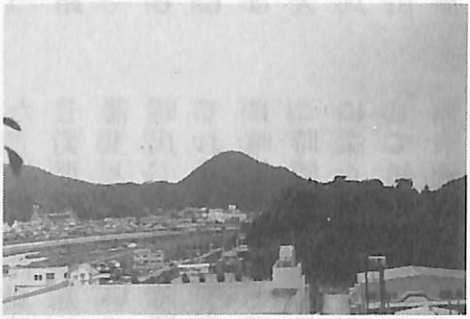
「伯州山名代々次第」

時氏 ― 師義 ― 義幸
　　└ 氏之……教之 ― 豊之 ― 政之
　　　　　　　　　　　　　└ 尚之
　　　　　　　　　　　　　　└ 勝憧
　　　　　　　　　　　　　　院殿 ― 澄之

鹿苑院主法系

夢窓疎石……維馨梵桂 ― 瀑岩等紳 ― 惟高妙安 ― 亀伯瑞寿

「伯州山名代々次第」（部分）



田内城跡（前方右）左に小鴨川と正面に打吹山

山名寺（倉吉市　巌城）

山名教之書下

山名氏楞厳禅寺追想

冷泉為人
（大手前女子大学教授）

この世の中、突然に、普段は忘れてしまっている人からの話で、新しい出来事がさまざまに進展していくことがある。三ヵ月程前にそれがおこった。その忘れてしまっていた人は浜坂の山本茂信先生のことである。

現在私の家では、「冷泉家の至宝展」を全国すなわち東京、姫路、名古屋、仙台、福山、福岡、京都の七ヵ所で行っている。この姫路展を開く朝に突然、「浜坂の山本茂信です」と大きな声が電話越しに聞えてきた。懐かしい声である。その大きさと張りのあることに驚かされた。ほんとうに驚いた。その電話は姫路展へ行くという趣旨であった。姫路で久し振りに先生と再会し、その御縁で「山名氏史料調査研究会」の会長を務めておられる山名章氏を存じ上げることになり、いま久し振りに「山名氏楞厳禅寺追想」を書こうとしている。不思議といえば不思議なことである。

山名氏は、衆知のとおり、十四世紀半ばより丹波から石見に至る山陰道に雄飛し、但馬因幡の両国を二世紀にわたって領し、室町将軍家の重臣である四職家の一つとして活躍した。江戸時代も、大名格の高家衆として但馬七美郡内が与えられ、江戸後期には村岡藩の藩主となっている。この山名氏のなかでも、時氏、氏清、時熙、宗全の四代が名声を上げており、特に三代時熙が名族山名氏の名を世に喧伝することになった。

時熙は和漢の教養に優れていた。殊に禅宗に深く帰依し、それをよく理解した文化人として知られている。これはおそらく将軍家の禅宗帰依にならって、先代の時氏や時義が禅

宗寺院の振興に務めたことに影響されてのことであろう。時義が但馬黒川の大明寺を開いた月庵宗光に参禅していた縁で、時熙も幼年の頃に月庵禅師に参じている。それが時熙を禅宗に深く帰依させることになったのであろう。嫡子満時の夭折を悼んで南禅寺に栖真院を興したり、楞厳禅寺の拡充に務めたり、南溟昌運や夢窓国師の禅風をことのほか思慕したことなどにそのことがよくあらわれている。この他に但馬の大明寺、円通寺、大同寺など禅宗寺院の外護に務めている。さらに時熙は、この当時、将軍や大小名などの間で社交として、盛んに行われていた連歌会や茶会などにおいて活躍し、大名歌人としてその名が知られていた。自らを「茶喰い」と称するほど、茶器類を愛玩する茶数寄者であったと伝えている。

山本茂信先生にはじめてお会いしたのは、私が関西学院大学の助手をしていた時で、もう二十五年以上前のことになる。その後、種々にお世話になった。殊に、山名氏、楞厳禅寺のことでは、ほんとうにお世話になった。それについては少しではあるが、昭和五十六年に、先生編集の『仏頂山楞厳禅寺』に「楞厳禅寺随想」として書いたことがある。そこに書いたとおり、私が楞厳禅寺を訪ねたのは文化財の防火対策の調査の時と、兵庫県のＪＣが編集した『ふるさとの文化遺産・兵庫県の文化財〈絵画編〉』執筆時の二回である。

防火対策の調査の時のことが、今でも鮮かに蘇ってくる。それは年度末の一月か二月のことであったと思うが、雪が積っていた。楞厳禅寺の庫裡で聞取り調査を終えて、庫裡裏の仏頂山の西側に位置する観音山の山上に建っている観音堂と、その内陣に安置されている十一面観音像の調査のため、山を登るべく庫裡を出ようとすると呼び止められたのである。山には雪が残っているからであった。これを穿きなさいと、長靴を出していただき、それを穿いて雪の山道を三十分位か、はっきりと

しないが相当な時間、登ったように思う。カメラや三脚を持ってのことであったので、かなり疲れた。それにひきかえ山本先生は実にお元気であった。そのお元気さに驚いたことを憶えている。その時、すでに第一線を退かれていたと思われるから相当な年齢であったと思う。

山上には立派な御堂が建っていた。十一面観音像も堂々としたものであった。これらの御堂や観音像、前述の楞厳禅寺とそこに所蔵されている山名時熙像をはじめとする、仏国師像、南溟昌運像、夢窓国師像などの名品が浜坂に認められることは、この地が、平安時代、室町時代にはいかに重要に位置にあり、経済的にも力を持っており文化的であったかを示している。これはいうまでもないことであるが山名氏の力あってのことであろう。殊に、後者の楞厳禅寺のことはまさに山名氏の力であった。今でこそ、太平洋側を表日本といい日本海側を裏日本といっているが、住昔には逆であって、日本海側が大陸とも近く、表日本であったのである。そうしたことから、西国大名の多くと同じように、山名氏も対明貿易を行って、大きな財をなしたからではないだろうか。それとも、仏頂山、観音山の両山とも、霊山として深く信仰されていたからであろうか。このようなことを想いながら、調査したことを憶えている。

調査と撮影を終えて山を降りてきたのは午後の三時頃であった。寒いのに山を登ってもらってと恐縮されながら、どうぞこれで一息ついて下さいといわれて、「水ガニ」をいっぱい出して下さった。これは実に美味しかった。湯気の立ちのぼる茹でたての熱いカニ。冷えた体を熱くさせ、カニの甘さも格別であった。何といっても、その篤い持てなしに身も心も熱くなった。

今回、山本茂信先生を通して山名章氏と御縁ができ、「山名氏史料調査研究会」の会報である『山名』の一、二、三号を送っていた

だいた。それをみていると、第一号の巻頭に、永島福太郎先生が「山名氏四代の栄光」と題されて、特別に寄稿されており、第三号には木村重圭氏が「山名時熙像とその人物」を書いておられる。永島福太郎先生は関西学院大学の恩師であり、木村重圭氏は関西学院大学の美学科の三年先輩である。この御縁、赤い糸にでも結ばれているのであろうか、とその不思議さに思いを馳せている。

永島福太郎先生の論文の最後に、山名宗全邸址、山名町（京都市上京区堀川通上立売下ル）、西陣の碑の三枚の写真が掲載されている。これらのものは、もちろんのことながら、山名氏にゆかりあるものであるが、いずれも冷泉の家（上京区今出川通烏丸東入）近くにある。家の前の通、今出川通を西へ十分も歩けば堀川通に出る、ここから西へ千本通までが元の西陣であり、高級絹織物の町である。衆知のとおり応仁の乱の時、山名宗全を中心とする西軍がこの地に陣を張ったことから、この語が生まれ地名として定着した。もともとこの地には、古代の朝廷に所属する織部司の織手の後身である大舎人座があって、「大宿織手」とも呼ばれる高級織物を早くから生産していたのである。それらのことを記した碑が、今出川通大宮東にある京都市考古資料館の入口前にある。応仁の乱に宗全は西軍の将として、堀川上立売下ルに邸宅を構えたが、細川勝元との戦いに決着をみることなく陣中に没している。その邸宅跡は、今も、山名町という町名としてその名が伝えられており、小さな碑が建っている。この碑の隣りに、冷泉家の門人の家があり、九十歳をすぎた小柄な品位ある婦人が一人、和歌と茶を楽しんでくらしている。

九日市城・此隅山城・有子山城

西尾孝昌

一　はじめに

但馬山名氏の本城といわれる城郭として、九日市城（豊岡市）・此隅山城（出石町）・有子山城（出石町）が周知されている。今日、九日市城の実態は不明確であるが、此隅山城・有子山城の様相はかなり明らかになりつつある。

此隅山城・有子山城の全体像の把握が可能になったのは、昭和六十年（一九八五）九月から始まった「有子山城・此隅山城の保存を進める会」の活動に負うところが大きい。保存運動は、此隅山城下の「御屋敷」（居館）を防御している最先端の曲輪群＝弥生末～古墳初の墳墓群（「御屋敷遺跡」）が、土取りで破壊されようとした危機の中で始まった。保存運動は困難を極めたが、その過程で調査研究も進展し、活動八年目の平成四年（一九九二）十一月には此隅山城・有子山城が国史跡（内定）となった。さらに平成八年（一九九六）十一月十三日付官報告示で正式に国史跡となり、今後城郭の保存・整備が具体化するものと思われる。[1]

本稿では、九日市城・此隅山城・有子山城の縄張りについて紹介しながら、但馬守護山名氏の守護所の変遷や此隅山城下町・有子山城下町についても言及してみたい。

二　山名氏の守護所の変遷

まずはじめに、山名氏と九日市（豊岡市）に関する文献史料をみてみよう。

①正平九年（一三五四）十月には、南朝方の足利直冬が九州から上京作戦を展開する際、時氏は九日市場を南朝軍の集結地に提供している（『伊達文書』）。

②康応元年（一三八九）三月には、時氏は将

軍の命に背き但馬に在住しているが、「城崎住」と記されている（『南方紀伝』）。

③明徳の乱前年の明徳二年（一三九一）には、妙楽寺城に立て籠る時長・弟時熙・氏幸を氏清・満幸勢が攻め、妙楽寺城を陥落させている（『妙楽寺文書』）。

④享徳三年（一四五四）には、持豊は播磨赤松氏の再興問題に関連して将軍義政の怒りを買って京都から追放され、長禄二年（一四五八）までの四年間但馬に在国している（『嘉吉記』）。享徳三年十一月、宗全（持豊）の但馬退居に同行した宗砌（連歌師）は但馬九日市で句を詠んでおり（『宗砌句集』）、康正二年（一四五六）六月山内泰通は九日市で宗全から安堵状を受けている（『山内家文書』）。さらに康正二年十二月には、宗全は建仁寺の瑞岩禅師を招いて九日市の西光寺で亡母の法要を行っている（『蝉庵稿』）。

⑤文明三年（一四七一）三月には、細川方に与同した山名是豊の子・頼忠が奈佐太郎らと共に九日市に乱入したが、垣屋宗忠の子・平右衛門に撃退されている（『応仁別記』）。

⑥長享二年（一四八八）六月、政豊は赤松攻めに失敗して播磨から撤退し、九日市に帰っている。同年九月には、あくまで播磨進攻を主張する垣屋を筆頭とする二十六人の国人が政豊を廃し備後守護山名俊豊を擁立しようとして、政豊・田公肥後守の立て籠る木崎城を包囲している（『蔭涼軒日録』）。

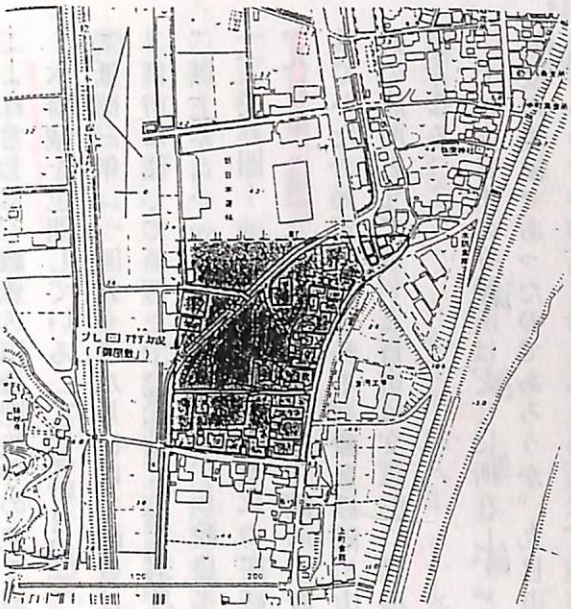
⑦延徳三年（一四九一）八月には、政豊は九日市に住している（『大乗院寺社雑事記』）。

以上から、文献的には時氏から政豊まで（一三五四～一四九一）の山名氏の居所は「九日市（場）」であり、そこに守護所が置かれていたことが考えられる。[2] 政豊以降、山名氏の居所としては、九日市は文献的に登場しなくなる。

では九日市の守護所はどこに所在し、どの程度の規模であったのであろうか。九日市の集落の中で守護所と考えられる所は、地籍図

から判断すると字「御屋敷」地区である。もともと九日市集落は円山川左岸の自然堤防上に立地しており、字「御屋敷」「下畑」も周辺地形よりも一段高い微高地となっている。地形の現況と地籍図から判断する限り、九日市の守護所（九日市城）は、字「御屋敷」と「下畑」を合わせた範囲にその所在が想定できよう。九日市城の規模としては東西約二百メートル、南北約二百メートル程度の方形居館が考えられ、各地の守護所の事例から、その居館は堀と土塁に囲繞されていたことが想定される[3]（第1図）。

守護所（九日市城）周辺には、城下（町）は想定できるのであろうか。外来者山名氏が九日市場を守護所とした経緯を考えてみると、南北朝以前からある程度発達していた九日市場を経済的に支配・利用するために、そこに守護所を設置したことが考えられる。「青谷」「染屋河原」「下市河原」などの地名からは職人町や市店が想定でき、また地籍図をみると南北に延びる一本街路に沿って短冊型地割もみられるので、守護所の南北にある程度の町屋が想定される。しかし、武家屋敷を想定できるような地名は見当たらない。



第1図　九日市城の推定範囲（西尾孝昌作図）

ところで『豊岡市史・上巻』によれば、山名氏は「戦時には此隅山城を本城としつつ、

平時には九日市の居館を守護の在所と定めて政務の中心とした」としているが、守護所の詰城はどこであろうか。これまでの史料からは、明徳二年の山名氏の内紛において時熙らが妙楽寺城に立て籠っているので、妙楽寺城が詰城であった可能性はあろう。また長享二年には政豊らが木崎城に立て籠っていることを考えると、木崎城もその候補となろう。また九日市城の対岸ではあるが、延文三年（一三五八）南朝方に属していた時氏が立て籠った三開山城も詰城かも知れない。[4] 此隅山城については後述するが、南北朝期に起源をもつ城であり、山名氏が出石神社の司祭権を掌握して地域支配を図るためには位置的に必要不可欠の城であろう。そのように考えると、守護所（九日市城）の詰城は妙楽寺城・木崎城・三開山城、さらには此隅山城などの城郭群で構成されていたことが考えられる（第2図）。

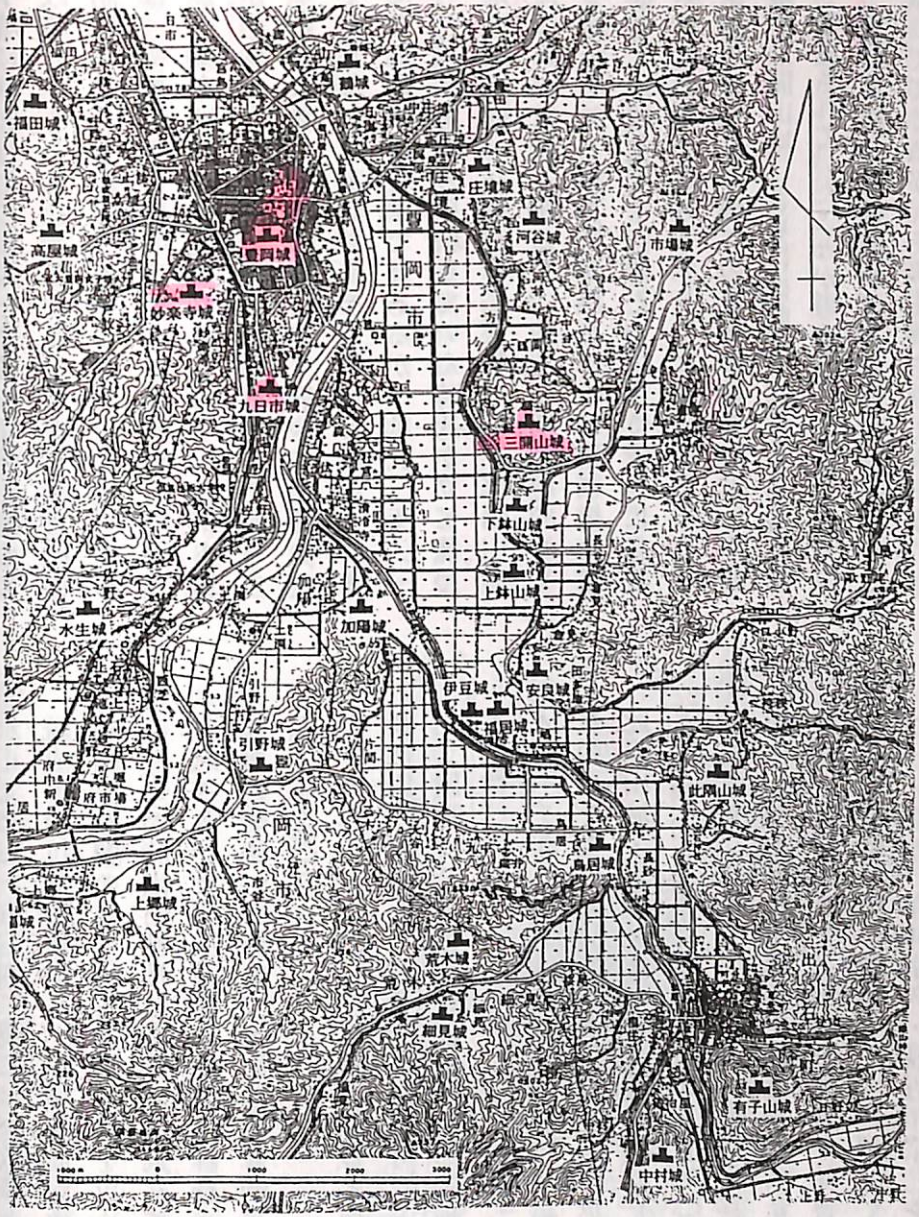
次に致豊・祐豊段階になると此隅山城が文献にでてくるが、その史料をみてみよう。

①永正元年（一五〇四）夏には、致豊と垣屋続成との抗争が再燃し、垣屋続成が致豊・田結庄豊朝の立て籠る此隅山城を攻めている。この時出石神社に軍勢が乱入して火災が起こり、社壇・堂舎・仏像・経巻・末社諸神が焼失している（「田結庄豊朝書状」『神床文書』）。

②天文九年（一五四〇）には、祐豊と塩冶左衛門尉が策謀し、長善秀（越前守）を此隅山（屋形か）で自害させている（『長福寺古記』）。

③永禄一二年（一五六九）八月には、織田信長の命を受けた秀吉らが生野銀山を接収し、此隅山城・垣屋城など一八城を攻略している（「朝山日乗書状案」『益田家什書』）。

④元亀元年（一五七〇）四月、織田信長は直轄化した生野銀山経営を任せた山名祐豊に書状を差し出し、太田垣ら国人が祐豊に従わず、生野銀山を依然として押領していることを責め、今井宗久・長谷川宗仁を派遣



第２図　豊岡・出石盆地の城郭位置図

する旨を伝えている（『山名韶此熙等宛織田信長書状案』）

⑤天正二年（一五七四）頃、山名祐豊、有子山城を築城する。

⑥天正八年（一五八〇）、羽柴秀長が有子山城を攻略する（『武功夜話』）。

⑦天正八年以降、有子山城は織豊政権（秀長・前野長康・小出吉政）の居城となる。

以上の経緯から、16世紀初頭以降の致豊・政豊の代には、此隅山城下に守護所があったものと思われる。その所在地は、此隅山城下の「御屋敷」であろう。「御屋敷」は東西約一一五メートル、南北約一六五メートルを測る広大なもので、三段からなる平地や土塁を使った「大手門」などの遺構がある。また、祐豊は天正二年頃此隅山城に代わる新城である有子城山を築城しているので、その頃守護所も有子山城下（現在の出石城辺りか）に移ったものと思われる。

これまで検討してきたように、14世紀～16世紀の但馬の守護所は九日市城から此隅山城下の「御屋敷」、さらには有子山城下の「御屋敷」？へと移動しているようである。即ち山名氏の守護所は、文献から判断すると、14世紀半ばから15世紀末までは九日市城、16世紀初頭から天正元年までは此隅山城下の「御屋敷」、天正2年から天正8年までは有子山城下に所在したものと推察される。

九日市城から此隅山城下の「御屋敷」への移動は、国人層特に垣屋氏との豊岡盆地をめぐる勢力争いに敗退し、豊岡から出石盆地を直接の勢力圏にしていた山名氏が出石に追い込められた結果ではなかろうか。また此隅山城下から有子山城への移動は、落城した此隅山城に代わる堅固な城郭を構築する必要性と家臣団の城下町集住を一層促進させる必要性がその要因であろう。

三　此隅山城と城下町

此隅山城がいつ頃、誰によって築城された

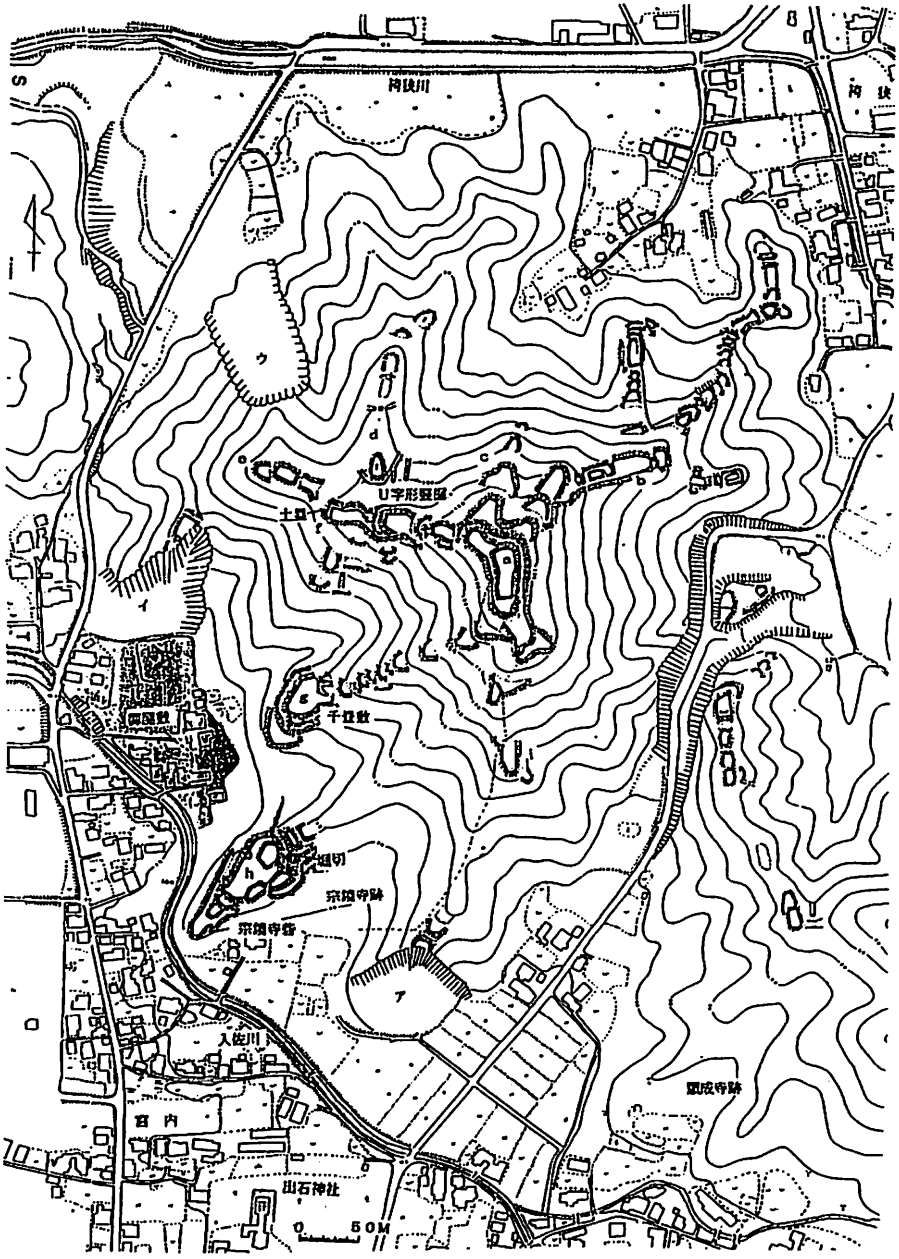
応安四 1371
時氏没

のか、文献的には不明である。伝承では、文中年間（一三七二～七四）山名時氏によって築城されたという。[5] しかし、応安五年（一三七二）一二月には但馬守護職が山名師義に付与されているので（『祇園執行日記』）、師義築城の可能性もあるという。また此隅山城の麓に「宗鏡寺跡」が所在し、明徳の乱で敗退した山名氏清の法号が「宗鏡寺殿」であるところから氏清築城説も考えられ、「此隅」という名称を最澄の著した『天台法華宗年分学生式』の「照于一隅、此則国宝」から採用したと考えると、南朝の後胤を奉じた氏清らしい着想ともいえるという。さらに明徳の乱後に但馬守護に再任され、氏清のために盛大な法要を行った時熙の築城も考えられるという。[6]

ここで、此隅山城の縄張りを検討してみよう。

此隅山城の城域は、南北約七五〇メートル、東西約一二〇〇メートルと広大で、「御屋敷」を両翼から包み込むような鶴翼の陣形を呈している。此隅山城の特徴は、標高一四三・七メートルに位置する主郭a（南北四二メートル、東西一五メートル）を中心にして、そこから派生する全ての尾根に階段状に曲輪を構築する放射状連郭式の曲輪配置をしているところにある。

此隅山城の縄張りは、大別すると、①長さ一〇メートル内外の小さな曲輪・浅い堀切・低い段差をもつ曲輪が構築されている部分と、②長さ二〇メートルを超える大きな曲輪・一〇メートルを測るような高い段差をもつ曲輪・深い堀切・折れをもつ土塁・U字形竪掘（堀切＋竪掘）などが構築されている部分とに分かれる。①の部分は、南北朝から室町期にかけてつくられたものであろう。②の部分は、主郭aを中心としたb・c・d（U字形竪掘）・f（折れをもつ土塁）・g（千畳敷）・h（「宗鏡寺砦」）・iの範囲であり、これらの部分は戦国末期（天正初年）の頃に改修されたものと思われる。時期については、有子山城に卓越するU字形竪掘の存在・折れをもつ土



第３図　此隅山城の縄張り図（西尾孝昌作図）

塁・宗鏡寺砦の縄張りなどから、天正二年の有子山城築城期が考えられる。

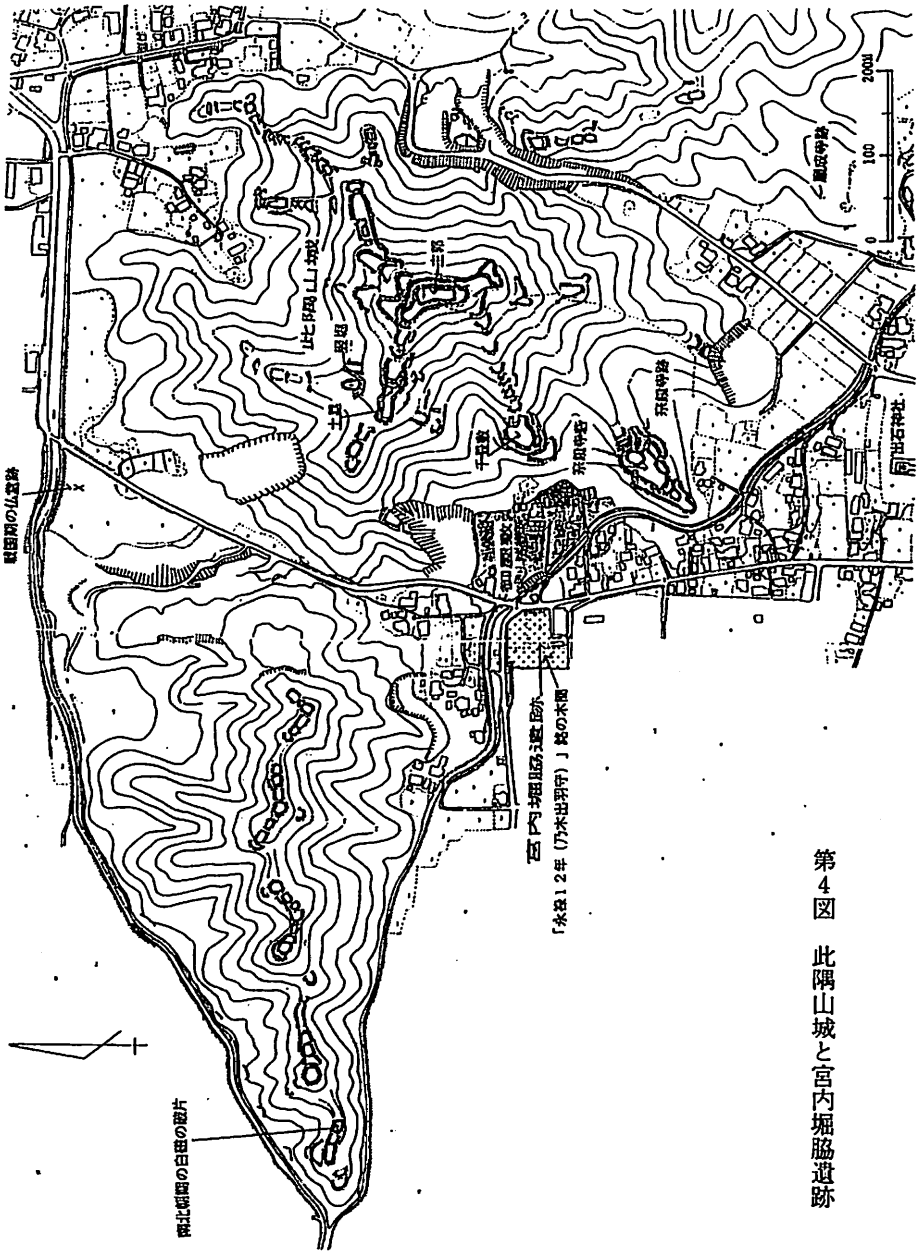
このように考えると此隅山城は、南北朝～室町期につくられた広大な領域をもつ山城が永禄一二年に落城した後、戦国末期の有子山城築城期において、コンパクトな戦国期城郭として改修された城であると結論付けることができよう（第3図）[7]。

前述のように、此隅山城下の「御屋敷」は戦国期の山名氏の守護所と想定されるが、城下町としてはどのような姿をしていたのであろうか。此隅山城下については、平成七年と八年の二度にわたり兵庫県埋蔵文化財調査事務所が宮内堀脇遺跡を発掘調査している（第4図）。その発掘調査結果と地籍図から、此隅山城下町について考えてみよう。

①宮内堀脇遺跡は山名居館（「御屋敷」）の西側五～六メートル下に位置し、字「堀脇」という地名をもつ。遺跡は幅約六メートルを測る二本の堀と土塁で区画されており、その中で礎石建物・掘立柱建物・「根太」を使用した建物、屋敷の区画・通路などの遺構が発見されている。この遺跡は陶磁器などの出土遺物から、一五世紀後半～一六世紀後半の武家屋敷と認定されている。

②宮内堀脇遺跡は大別して、永禄一二年～天正八年頃まで（第一整地層）、一六世紀前半～永禄一二年まで（第二整地層）、一五世紀末～一六世紀前半まで（第三整地層）、一五世紀末以前（第四整地層）、の四つの整地層からなるという[8]。

第四整地層と第三整地層の間には焼土層があり、永正元年（一五〇四）出石神社が焼失した時の焼土層とみられている。また第一整地層と第二整地層との間にも焼土層があるが、この焼土層から「永禄拾弐年八月廿四日、乃木出羽守」の木簡が出土している（第5図）。「永禄一二年」は秀吉らによって此隅山城が落城させられた年であり、「乃木出羽守」は文献的には明らかではな



第4図　此隅山城と宮内堀脇遺跡

（表）
乃木出羽守□□二つ　くら□□二つ

（裏）
永禄弐年八月廿四日　以上三つ

第5図　紀年銘木簡釈読
（註8文献より）

いが、天文四年『総持寺奉加帳』の中に、祐豊の家臣として乃木日向守・乃木丹後守・乃木長左衛門尉の名がみえるので、乃木一族だと思われる。

さらに平成八年の調査では、人名を墨書した多量の土師器皿や中国製陶磁器の他、永禄・天正の両合戦で使用された鉄砲玉・金銅製の小柄などの金属製品、位牌（表面「帰本道祐禅門霊位」、裏面「天文廿三年七月廿三日」の墨書）・折敷・将棋の駒（「銀将」）などの木製品が出土している。

第一整地層は、祐豊が信長に許されて堺から帰った後、天正二年の有子山城築城までの間の生活面であろう。

尚、この遺跡からは一五世紀後半の遺物が出土しており、此隅山城に伴う武家屋敷の形成期が一五世紀に遡る可能性が高くなってきている。

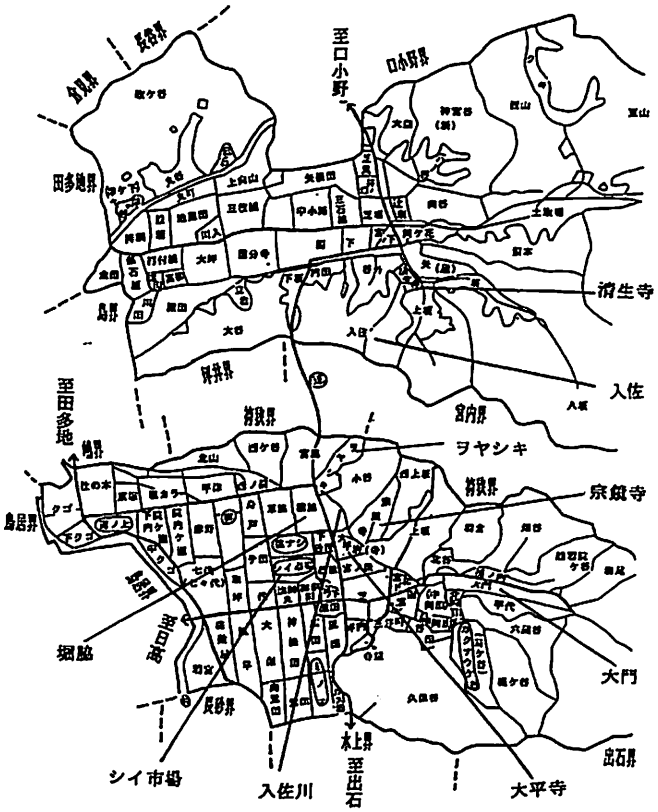
③字限図では、宮内堀脇遺跡の南側に字「市場」「深市場」「シイ市場」（平成九年度発掘予定）があり、ここが町屋の可能性がある。「市場」地区は現況としては周りより一段高い微高地となっており、短冊型地割が出土するかもしれない。また市場は城下の外れに位置することが多く、「市場」の南側には出石神社が所在することから、在地勢力（出石神社）と新興勢力（山名氏）との接点が「市場」部分に当る可能性が高い、とみられている。[9]

しかし「市場」から離れた出石川の自然堤防上に位置する「数珠屋」や「舟戸」などの地名もみられるので、必ずしも町屋を「市場」地区に限定しないで、散在的な城下町を想定した方が良いであろう（第6図）。

④各地の事例から判断すると、武家屋敷につ

いても宮内堀脇遺跡に限定できるものでも無いようで、もっと広く、此隅山城周辺に点在していた可能性を考慮に入れる必要性もあろう。

⑤寺院については、字名からみて、此隅山城周辺に宗鏡寺・太平治（寺）・願成寺・宝高寺・清生寺・船若院などの寺院が配置されていたようである。



第6図　宮内・袴狭地区の小字図

以上みてきたように、此隅山城下町は山名氏の居館（「御屋敷」を中心にして、その前面或は山麓に武家屋敷や町屋（「市場」「数珠屋」など）をもち、此隅山城周辺に菩提寺である宗鏡寺を初めとする寺院を配置した姿が想定できる。また出石神社や総持寺も当時現在地に所在しており、山名氏が宗教的・軍事的に利用していたのであろう。

ところで、此隅山城下町には「総構」は想定できるのであろうか。従来「総構」

は一般的に織豊期になってから出現すると考えられていたが、今日では戦国期において既に顕在化すると考えられるようになってきている。[33] 武家屋敷を区画する二重の堀、武家屋敷の南に隣接すると考えられる市場（現段階では武家屋敷と市場を区画する堀は発見されていない）や散在する町屋の存在からすると、此隅山城下町の空間構造としては、①山城とその山裾の居館、②堀に囲まれた居館前面の武家屋敷地区（居館と武家屋敷地区は五～六メートルの段差があるが、堀で区画されているかどうかは不明）、③武家屋敷地区に隣接する「市場」地区と散在する町屋地区、④散在する寺院群、で構成されているようである。また地形から判断すると、城下町を囲繞する外郭（外堀）としては城下の西側を蛇行して北流する出石川が考えられよう。

このような此隅山城下町の内郭・外郭からなる総構は、宮内堀脇遺跡の武家屋敷を区画する二重堀の成立期が一五世紀から一六世紀初頭と考えられているので、[34] 現段階ではその時期に形成されたものと判断されよう。

四　有子山城と出石城下町

有子山城は此隅山城落城後、信長に許されて出石に帰った祐豊が、天正2年頃築城した城である。しかし有子山城は、天正八年（一五八〇）の秀長の第二次但馬進攻によって落城した。

ここで、有子山城の落城に関する史料を紹介しておこう。

〈史料①〉「但州出石郡子盗山城主、山名祐豊取詰めの事」（『武功夜話』）

一、但州は古来より、足利幕下六分一公金吾入道宗全但馬守護たる処、去る戊寅年羽柴小一郎殿乱入、守護代の小田垣土佐守の居城、朝来郡竹田の城を取り詰め抱え候いてより、但馬勢勢い無く、出石郡子有山の守護代垣屋隠岐守（垣総）、同垣屋駿河守（豊続）相固め居り候処、羽柴小一郎殿取

天正六
一五七八

り懸り候。一戦も交えず子有山を引き退き気多郡、二方郡に相構えお手向い候なり。

＊史料中の（　）内は筆者記入

〈史料②〉「羽柴秀吉禁制」（『福成寺文書』）

禁制　福成寺広原谷中

一、軍勢甲乙人乱妨狼藉事

一、陣取防火事

一、伐採竹木事

右条々堅令停止訖、若於違背輩者、速可処罪科者也、仍如件

（天正八年）三月晦日　筑前守（秀吉）（花押）

＊史料中の（　）内は筆者記入

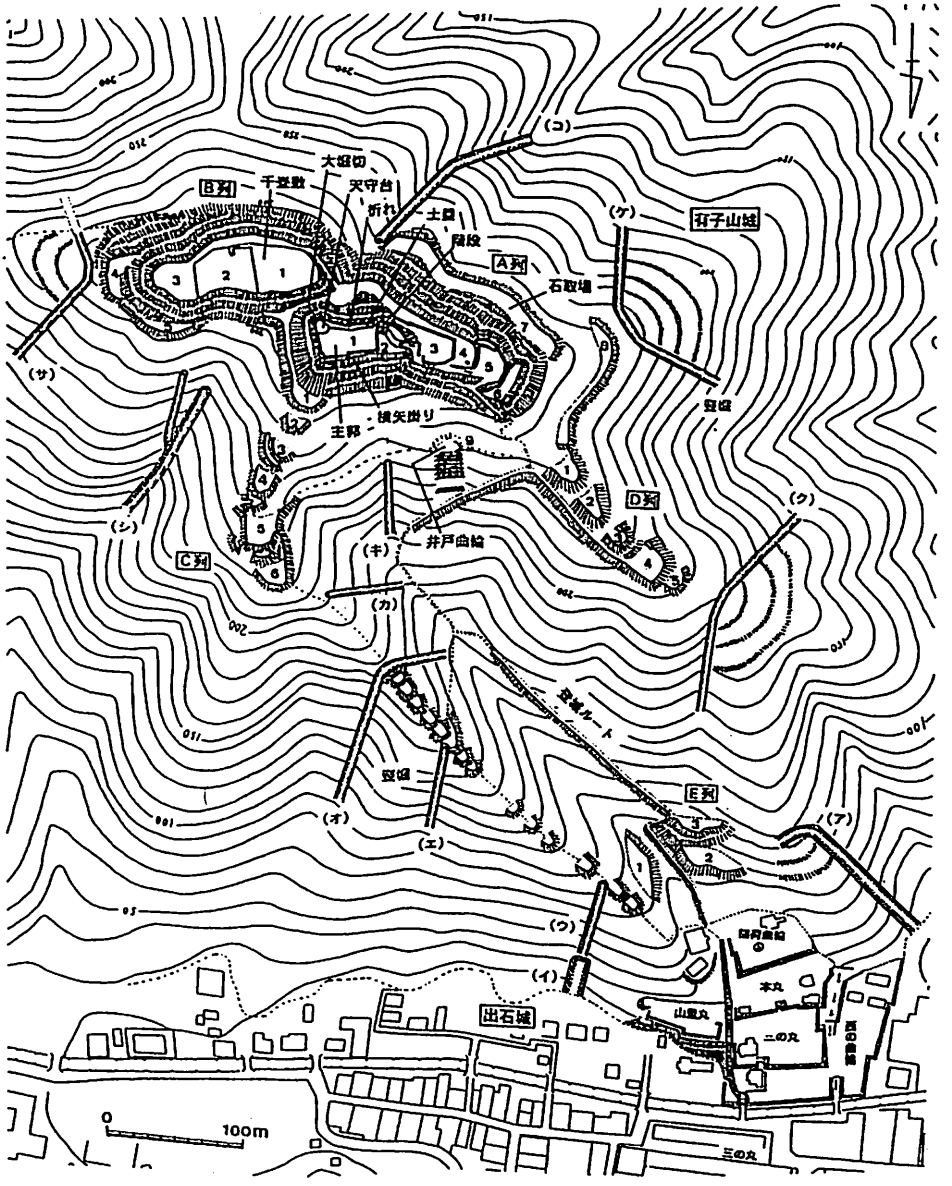
〈史料①〉からは、有子山城を守備していたのは祐豊・氏政だけでなく、その主力が垣屋一族（恒総＝楽々前城主、豊続＝轟城主）であったことが分かる。

〈史料②〉からは、出石川を挟んで丁度有子山城山を攻撃する秀吉（実際は秀長）から禁制を獲得したことが判明する。注目すべきことは、広原谷中が「陣取」禁止を獲得していることである（地元の伝承では、福成寺が秀長の陣所になったという）。また有子山城落城は天正八年五月一六日のことであったといわれており、「三月晦日」という禁制の日付から判断すると、一ヶ月半にわたる有子山城包囲戦が展開されたのであろうか。

有子山城落城後、天正八年羽柴秀長が城主として入部し、有子山城は織豊政権の但馬支配の拠点となり、また天正九年（一五八一）の鳥取城攻めの拠点ともなった。その後、天正一三年（一五八五）には前野長康、文禄四年（一五九五）には小出吉政が入部する。

現在見る有子山城は、天正八年～文禄年間にかけて、山名氏の土城を羽柴秀長や前野長康ら織豊勢力が石垣の城に改修したものである。有子山城主の居館は出石城の位置に所在したものと考えられ、山裾の居館と山頂の詰城がセットで機能していたようである（第7図）。

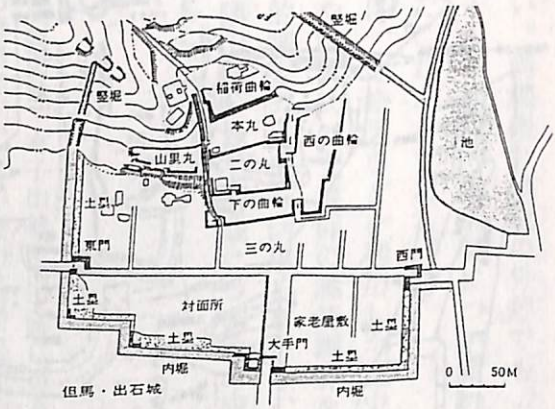
ここで、出石城についてみておこう。出石城は慶長九年（一六〇四）小出吉政によって



第７図　有子山城の縄張り図（西尾孝昌作図）

築城されているが、居館を改修して整備・拡張したものと考えられ、山上の有子山城を詰城として機能させようとしたものである。有子山城が廃城となり、出石城のみ使用されるようになるのは、元和元年（一六一五）に出された一国一城令以降であろう。尚出石城もさらに改修を受けており、堀と土塁・三ヶ所の虎口（大手門・東門・西門）で防御を固めた三の丸は寛永年間（一六二四～二八）頃に城地を拡張して構築されたものであろう（第8図）。

さて、山名祐豊が築城した有子山城はどのような縄張りをしていたのであろうか。筆者は基本的には、織豊勢力が築いた石垣部分を取り除いた姿が、山名氏時代の有子山城であったと考えている。尤も、主郭背後の大堀切（幅二八m、深さ一二m）・帯曲輪、千畳敷（一二四m×四五m）などは織豊勢力によって大改修されたものであろう。従って山名氏時代の有子山城は、標高三二一mの高所に位置する主郭を中心にして、三方向に延びる尾根に連郭式に曲輪を配置し、各尾根を大規模な堀切・竪堀（サ・ケ・ク・オなど）を構築して防御しようとしている点に最大の特徴がある（出石城の左右を防御している幅一〇mを測る竪堀ア・イ・ウは、小出時代に構築されたものであろう）。尚山名時代の居館も、現在の出石城の位置に存在していたものと思

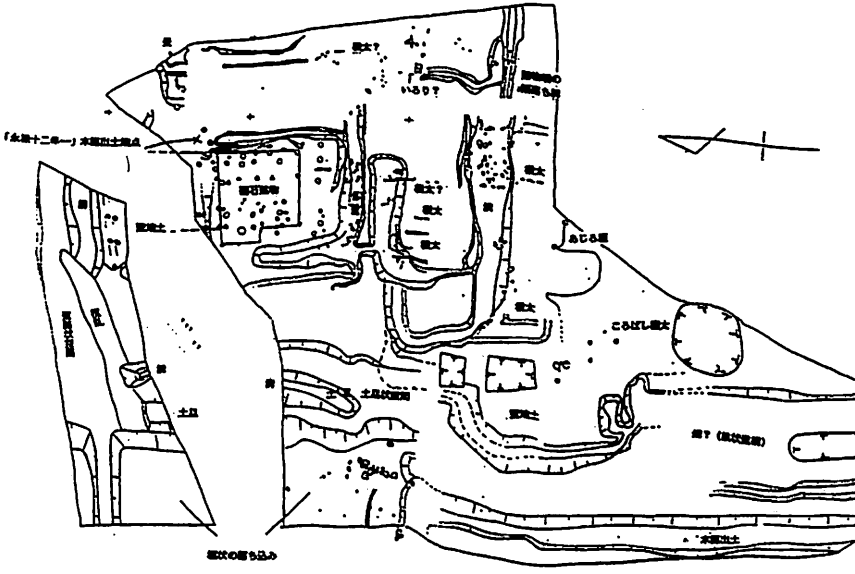


第8図　出石城の縄張り図（西尾孝昌作図）

われる（第7図）[92]。

ところで、山名氏時代の有子山城下町の姿は想定できるのであろうか。残念ながら、その様相はよく分からない。その理由は、山名氏の城下町の上に織豊勢力の城下町、さらには江戸期出石城下町が複合して形成されているからである。ただ、江戸期の出石城下町の中に「宗鏡寺」や「願成寺」があり、此隅山城下町からの移動を推定させる。また、町名に「八木町」・「宵田町」・「田結庄町」があり、これらはいずれも八木氏・垣屋氏・田結庄氏という上級家臣の屋敷が存在したことを想定させ、祐豊が有子山城下に総ての家臣団を集住させる政策を採用しようとした可能性を窺わせる。しかし、この時期の町屋の実態については、皆目分かっていない。

尚出石城下町については、内堀・外堀で囲繞された「総郭型」「竪町型」を呈する織豊系城下町を、江戸期に「内町外町型」「横町型」の城下町として改修・整備されたもの、



第9図　宮内堀脇遺跡　遺構平面図　（註8文献より）

と考えられている。[03]

五　おわりに

以上、山名氏の本城である九日市城・此隅山城・有子山城について日頃考えていることを書き綴ってきたが、不十分なものであることをお断りしておきたい。それは、次のような理由による。

此隅山城・有子山城は国史跡になったものの、両城についてこれまでに考古学的調査を含む本格的な調査研究はなされておらず、わずかに有子山城・此隅山城の保存を進める会が地表面観察による縄張り調査を実施したにすぎない。また城下町の調査も、宮内堀脇遺跡の調査（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）・出石町役場建設に伴う出石城三の丸の調査（出石町教育委員会）が実施されたものの、まだその実態解明には程遠く、町屋については全く調査の手が及んでいない。さらに九日市域については、その範囲が既存の集落と重複していることもあって、全く調査がなされていない。尚縄張り研究の分野でも、此隅山城・有子山城周辺の城郭群についての悉皆調査もまだこれからである。

今後は、地籍図などを利用した歴史地理学的調査や山名氏の支城群の悉皆調査を行い、考古学的調査の成果を活用しながら、九日市域・此隅山城・有子山城についての研究を深めていきたい。

〈註〉

（1）此隅山城・有子山城が国史跡に至るまでの保存運動の経過については、次の文献を参照していただきたい。尚、此隅山城下の地元出石町宮内地区には、一九九七年八月「此隅山城保存会」が結成された。

『此隅山城を考える第一集』（此隅山城の保存を進める会　一九八七）

『此隅山城を考える第二集ーシンポジウム但馬の城』（此隅山城の保存を進める会　一九八八）

『此隅山城を考える第三集ー有子山城調査報告』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九〇）

『出石城と町並み保存（此隅山城を考える第四集）』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九二）

『此隅山城と有子山城（国史跡指定記念特集・此隅山城を考える第五集）』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九四）

峰岸純夫「文化財の調査・保存と地域史研究」『岩波講座・日本通史　別巻二　地域史研究の現状と課題』（岩波書店　一九九四）

（2）南北朝・室町期における山名氏の守護所が九日市に所在したことは、既に石田松蔵氏・山口久喜氏などによって文献的に指摘されている。最近では、山口久喜氏が『山名（第三号）』で詳述されている。

（3）周防・長門の守護大名である大内氏の居館は、堀と土塁に囲まれた一辺が約一町半程度の方形館であるという（『守護所から戦国城下へ』名著出版　一九九四）。九日市城を考える上で参考になろう。今後の発掘に期待したい。

（4）三開山城は、南北朝期の延文三年（一三五八）、北朝方の今川頼貞の攻撃に対し、南朝方の山名時氏が立て籠った城として周知されている。しかし、現在に残る城郭遺構は畝状竪堀を含む二十数本の竪堀を構築した戦国期城郭の様相を呈しており、南北朝期の顕著な遺構はみられない。

（5）江戸期に編纂された『但馬発元記』『但州一覧集』などに記されている。

（6）小坂博之「但馬山名氏と因幡山名氏」『此隅山城と有子山城』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九四）

（7）西尾孝昌「此隅山城の縄張り調査を終えて」『此隅山城と有子山城』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九四）

（8）『宮内堀脇遺跡現地説明会資料』（兵庫県埋蔵文化財調査事務所　一九九五）

『宮内堀脇遺跡現地説明会資料』（兵庫県埋蔵文化財調査事務所　一九九七）

（9）近江京極氏の上平寺城下では、一六世紀前半に既に武士居住区と町人居住区が堀によって分離していた可能性が指摘されている（中井均他「上平寺城とその城下町」『近江地方史研究　第二九・三〇合併号』一九九四）。

（10）前掲註（8）

（11）前掲註（8）

（12）西尾孝昌・谷本進「有子山城調査報告」『此隅山城を考える第三集』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九〇）

（13）西尾孝昌「有子山城と出石城下町」『出石城と

町並み保存』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九二）
西尾孝昌「但馬地方における戦国・織豊・江戸期城下町の研究」『紀要・白樫第七号』（兵庫県立豊岡南高等学校　一九九七）
千田嘉博「有子山・出石城と城下町」『出石城と町並み保存』（有子山城・此隅山城の保存を進める会　一九九二）

写真は此隅山城

山名源七郎豊通大應寺に眠る

山根幸恵

因幡の守護・山名誠通が天文十七年（一五四八）所謂〝「申歳崩れ」〟で討死してから四百五十年。その遺児・源七郎豊通が家老・武田高信のために、鴆毒によって毒殺されてから四百三十五年になる。この時代は「下剋上」の世で、守護は守護代にと、実権は下層のものに奪われた時代である。

山名源七郎毒殺の経緯を明らかし、その子孫と称する山名家について記した。

一　山名誠通因幡の守護となる

但馬の守護・山名持豊（宗全）の子・勝豊は、嘉吉元年（一四四一）六月二十四日・赤松満祐によって、将軍義教と共に討死した熙貴のあとを受けて、因幡の守護となった。

従来、因幡の守護の居城は、岩常（岩美郡岩美町）の二上山に設けられていたが、勝豊はこれを移し、湖山池のほとり・布施の天神山（鳥取市布勢）に城を築きこれに拠った。

豊時、豊重と移り、豊頼（豊重の弟）、豊治（豊重の子）と継くが、このころ國内の動揺は避けられなかった。豊治には嗣子がなかったので、父豊重の弟・豊頼の子・久通が相續した。しかし、「諸臣異議区々ニシテ評議一決セズ」（『稲場民談記』）という状況であったので、山名氏の惣領である但馬の屋形出石此隅山城主（兵庫県出石町）・山名誠豊の勢力を背景に国人の統制を計った。久通は、誠豊の一字を授かり、『誠通』と名乗り、享禄元年（一五二八）二月十四日、因幡の守護となった。

『史料綜覧』・天文六年（一五三七）八月の条には、「因幡守護・山名誠通ヲ従五位下ニ叙シ左馬助ニ任ズ」と記している。しかし、天文十年（一五四一）但馬の山名氏を祐豊が

継ぐと、但・因両国は互に衝突をくりかえし、次第に但馬・山名氏から離反して行った。誠通はその後「久通」と改名している。『稲場民談記・巻之十・筆記之部』には、「天文十二年十月十五日　久通花押　中村伊豆守殿」「天文十四年卯月十六日　久通花押」とあるから、少くとも天文十年十月以降は「久通」を称したとみてよかろう。

天文十二年には但馬勢が布施附近の農民を誘って内通を約束させ、急襲したものゝ、彼らはむしろ布施の屋形に急を告げ、側面から但馬勢をついた。この比類ない働きによって「諸公事并棟別以下御免許」書状が、山名氏の重臣・隆盛・重續両名より、九月二日「溝口（みぞくち）（鳥取市湖山町）百姓中」宛に発せられてる。

二　尼子晴久鹿野城を襲う

大永四年（一五二四）五月、出雲の戦國大名・尼子経久は伯耆に侵入した。尾高城（米子市）の行松（ぎょうまつ）入道、岩倉城（倉吉市）の小鴨掃部助　北条・堤城の山田重直、泊・川口城の山名久氏、羽衣石城の南条宗勝、倉吉・打吹城の山名澄之らの伯耆の諸家は尼子氏の伯耆侵入軍によって城を追われ、因幡の布施の屋形、但馬の守護・山名誠豊（のぶとよ）を頼って流浪した。

尼子勢は泊・河口城に尼子國久の子誠久（まさひさ）を置いて因伯の国境の備えとし、羽衣石（うえし）城には新宮党の尼子国久が入り、東伯耆を管した。西伯耆の統轄としては尾尾高城に吉田光倫、八橋（やばせ）城に吉田左京亮を配して、尼子支配を確立した。

天文十三年（一五四四）二月尼子晴久は伯耆・因幡に軍を進めた。晴久は数ヶ国の軍士三万余騎を率いて八橋城（東伯郡東伯町）に入り、逗留して伯耆一円を制圧した。

四月に入ると尼子勢は東進して大崎城（気高町水尻）を切り崩し、鹿野（しかの）城に攻撃の焦点を指向した。

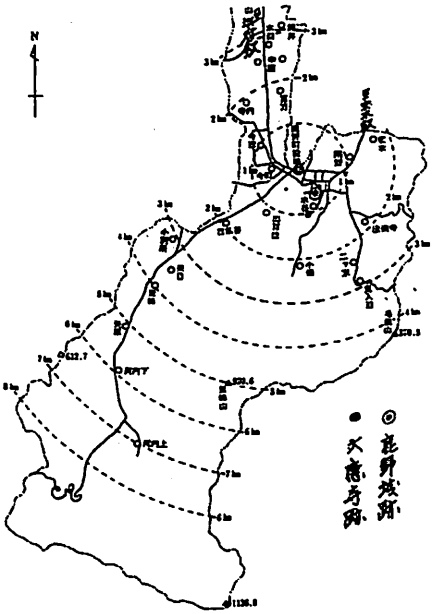
鹿野城は志加奴城とも記し、創建年代は不詳であるが、橘氏の創建にかゝるといわれ、

志加奴氏は国侍として、永くこの城に拠ったという。光元谷、坂本谷・勝見谷・逢坂谷を集約する要地に位置し、西方伯耆路に対する拠点としては重要視されて来た。天正末期の亀井武蔵守茲矩（これのり）の居城の時の如く、城地の拡充はなされていないが、城郭としては女山であるが、ある程度整備されたものであった。

尼子晴久は大崎城を攻め陥した勢に乗じ、全力をふるって鹿野城に攻撃をかけた。城主志加奴入道は三百余人の将士と一丸となり、死を決して戦った。全員玉砕し志加奴城は落城した。尼子勢はさらに鳥取、私部に攻撃を加え、反尼子勢力の拠点を、次々と陥落させるとの見通しであったが、国許より晴久の母危篤の報が届いたので、五月上旬、兵を収めて撤退した。

三　鳥取・久松山に築城

山名久通は但馬の山名氏、出雲の尼子氏、美作の草刈氏の侵攻を防ぐため、「長臣相集り評議しけるは、（当地）天神山の城郭は、山上低くして平城（ひらじろ）の如し、敵襲ひ来りても、防ぐべき要害なく……所詮此城の近辺に出城を拵（こしら）へ、定番を置き、敵寄せ来らば急ぎ布施へ注進し、或は鳥取にて之を支へ、或は千代川にて之を防ぎなば、敵争（いかで）か寄来るべき、是に勝（まさ）る要害なし」として、天文十四年（一五四五）二月半ば、鳥取の久松山に「鍬初（くわはじめ）」の儀式を行い「縄張は軍功の老臣、田原何某と云へる者の城取とか」いうことであった。平常、城の守備は「家の長臣替々勤めしが、後



鹿野町役場を中心とした同心円

諸城配置図

には武田豊前守定番として在城」することになった。

さらに、布施の近辺、徳尾の新山に築城して中村伊豆守に衛らせ、布施への往来を監視し、布施の斥候第一の要害とした。この外、吉山、足山、釣ノ山、鍋山、正木ヶ鼻等数ヶ所に砦を拵えた。

四　布施の申歳崩れ

天文十七年（一五四八）戊申の歳、布施の山名勢は八上口（八頭郡方面）に兵を派遣して、手薄になっていたところ、俄に但馬勢の攻撃をうけ、防戦術なく、要害は次々と踏み破られ、久通自身も自ら防戦の指揮をとったが、多勢に無勢、遂に乱戦の中に討死した。これを「布施の申の歳崩れ」という。

方々の城、砦に派遣せられていた人数もこれを見て馳せ集り、敵・味方もみ合う内に、敵は次第に引きしりぞいて行った。しかし、屋形を失った因幡勢の意気は沈滞した。

森下・中村・武田・用瀬らの老臣たちは相談して、幼稚なる子息源七郎・弥次郎両人を守り立て、諸臣協力して布施の城を堅固に保つべしとした。現在では、但馬の屋形の協力を得なければ不可とし、「彼の旗下に属し和議をなす」こととした。

但馬の屋形・右衛門督祐豊（入道宗詮）は両国和談とし、久通の二人の遺児の後見のた

め　且つ諸臣の鎮めとし、祐豊の弟・九郎豊定を守護代として、布施の城に居らせた。豊定は「天性気象聰明にして、且仁徳も備はりし人」であったから、先代の旧臣たちもよく従い、彼の命令にそむく者はなかった。

この様にして十年余にして豊定が歿したので、その子・豊数がその後を継ぎ、守護代となった。豊数の世となっても「上下合体替ること」がなかった。久通の遺児も成長し、「兄源七郎殿は已に廿二三に成給ひ、彌二郎殿も相つゞきたる年令なり、二人ながら殊便利発にして才覚有り、先國主の蹤をもつぎ給ふべき器量たり」と、領内の人々は悦んでいた。

五　武田参河守高信謀叛

武田豊前守（鳥取市玉津・鵜尾（ひよどりお）城主）は鳥取城築城の功労者であり、自ら願って定番となった。そして、これに拠ってその勢力の拡張強化を計った。子・参河守高信に至って、ますます布施より独立の傾向を強め、徳吉将監、秋里玄蕃允ら國人を味方とし、岩常の三上兵庫とも通じ、布施の屋形に対する一大勢力を因幡東部に形成した。

永禄五年（一五六二）ごろになると、武田氏は布施山名氏と公然と対立するようになった。一方、尼子氏の勢力に代って、毛利氏の勢力が抬頭してきたので、これと結び、因幡一円の支配を目指すようになった。

布施の屋形豊数は重臣と協議の上、鳥取城を攻撃することになった。永禄六年（一五六二）四月三日・中村伊豆守を大将として天満縄手より推出し、秋里大星の橋を渡り、湯所口より攻めたてた。伊豆守は「城下の町を踏破り、直に城中に攻上り、高信を討取る可しと、歯がみをなしつゝ、一人士卒に先立て進みけるを、敵是を見知り鉄砲を以て隙間なく打掛くれば、伊豆守忽ち胸板を打ち抜かれ、馬より倒るまに落ちてぞ死したりける。城方は是に力を得、透間なく攻懸ければ、大将討たれしことなれば、士卒等途方に迷ひ、裏崩

れして引去りける間、寄手散々に追立られ、辛ふじて布施の城へ帰った。

六　山名源七郎鹿野城へ移る

布施の山名氏は鳥取の武田氏との対抗の上からも、西因幡の経営の重大さに着目し、鹿野城に久通の嫡子・山名源七郎を送り、気多郡（因幡西部地域）一円の統治を行なわせた。

山名源七郎豊通は旧臣どもを召しつれて鹿野城に移り住んだ。「気多（けた）の地侍ども奉用し、近郷の武士出仕隙もなし、奉仕精勤の者には恩禄を興へられ、怠慢不忠の者には刑罰を以て懲戒を加へなどし給へば、政道よく行はれ盛徳を唱ふる声、洋々として巷に満てり、然れば郡中はこゝ暫らく静謐にして、皆々武威に靡きけり」と、『稲場民談記巻之二』に記し、その政治をたゝえている。

源七郎は、「性質発明にして、政道にも敏く、心も剛にして、軍の謀略、士卒の指揮、天才とも云ふ可き程」の人物であったが、残念ながら「物に溺れる心」が深かったため、年二十余歳で非業の死をとげることになった。

鳥取城の武田高信は「邪智奸謀に長（た）けたる者」であったので、内々気多（うちうちけた）、高草（たかくさ）両郡内で、高信に味方する者を作っておいた。そんな時、源七郎が鹿野の城に移ってきた。高信は地侍と心をあわせ、源七郎を亡き者にしようと種々計画をたてたが、仲々思うようには行かなかった。そんな時、「源七郎殿好色に耽り玉ふ由」を聞き、得たりとその対策にとりかゝった。

領内より「世にも稀なる美人を尋ね出し、様々遊芸を教へ遊び者に拵へ」あげた。この女は「齢二八斗り、一笑百媚の麗質」であった。高信はこの女を呼び、「源七郎の側近に侍し、すきを見て一服もること」を命じ、その母を人質として手許にとどめ、事成就の時は、厚く褒美をとらせることを約した。

女は縁を求めて気多におもむき、源七郎の館に入り、宮仕えすること、なった。

源七郎はこの女を見ると、大層お気に入り

となり、「日夜の酒宴遊興、踏舞歌曲夜を専らとし、日を短しとし玉ふ」有様となった。しかし、この女が高信の密命をうけた隠密であるとは誰も気附かなかった。唯、岩村某という側近の士は、「唯今箇様なる御振舞は敵方の聞へも宜しからず、且つ其の女の素性も分らず、又敵人の謀略なるやも計り難く候へば、速に召し放され然る可しと理を尽して諫め」たが、源七郎はいっこうに聞こうともせず、溺愛した。

女は時分はよしと考え、「深閨の内、酔ののあまり、前後を覚へ玉はぬ折柄、高信より教への侭に鴆毒（中国南方の山中にすむ鴆（ちん）という鳥の羽にある猛毒。甘くて美味であり、鴆の羽をひたした酒はよく人を殺すといわれる。）を酒中に投入し、手づから酌を取り進めければ、是ぞ断命無名の酒と知り玉はず」飲み干した。それより一両日過ぎて、心地悪くなり、十日余りして「苦悩悶乱して息絶へ」てしまった。

岩村某は、彼の女を引きよせ、「主君不意の凶変汝が所為に紛れなし」と云って、「忽ち一刀に刺殺し、其刀にて己が腹十文字に割き破り、忠烈な殉死を遂げた。

七　山名源七郎の墓

山名源七郎豊通の墓は鹿野町水谷の聚落の南方山麓・大應寺という字の山名修氏の墓地に祀られている。

『稲場民談記』には、「源七郎殿遺骸并に岩村の死骸をば、水谷の回竜寺と云ふ古寺に納め、墓を築き僧衆を請じ、経を誦し、懇に追善の儀式」を営んだと記し、『因幡誌』には、（岩村某は）「女を切殺し、其刀にて腹掻切って」自害した。「墓も其側にあり。石を積て塚と成す。此地旧寺跡なるを以て塚跡數多紛乱として明に知がたし。按るに民談記源七郎殿遺骸は水谷の回龍寺といふ古寺に納め、墓を築くと、然るに此地は霊亀山大應寺の旧迹にて今も字を大應寺と云ふ。回龍寺は是よ

り奥、小畑村旁爾にあり。想ふに回龍寺に葬送して遺骸を此地に安措（置）せしものか」と誌している。

また、『鹿野小誌』（昭和三年四月刊）によれば、「死骸は気多郡水谷村（気高郡鹿野町水谷）大應寺に葬る」と記している。

霊亀山大應寺は花山天皇（九八四～九八六）の寵臣藤原稀茂由緒の寺であるが、詳細については不明である。削平された平地が何段も谷間に沿って残っており、相当な規模の寺院が存在したと見られる。

水谷の集落の南かみの西側の山麓に山名氏の墓地があり、『自然石無銘の碑碣（石ぶみ）』

山名家に隣接する大應寺の古墓群

山名源七郎の墓碑
－水谷・大應寺山名家墓地－

山名源七郎豊通墳墓之地
明治29年4月12日山名源三郎建立

が建っている。その隣に、「山名源七郎豊通君墳墓之地」「明治廿九年四月十二日」「山名源次郎建之」と刻した石碑が建てられている。

尼子氏略系図

- 尼子持久（あまこもちひさ）
  - 清定
    - 経久（つねひさ）　伊予守　文明十八年富田城入城　天文十年十一月十三日没
      - 政久（まさひさ）　民部少輔　永正十年九月六日没
        - 國久（くにひさ）　新宮党・紀伊守　天文廿二年十一月一日殺害
          - 興久
          - 女子
          - 誠久（まさひさ）　天文廿二年十一月一日没
            - 氏久　天正十八年七月三日没
              - 勝久（かつひさ）　天正十八年七月六日播磨上月城にて切腹
              - 弥四郎
              - 季久
              - 吉久
            - 豊久　天文十五年六月廿八日討死
            - 敬久
            - 与四郎
            - 女子
        - 晴久（はるひさ）　修理太夫　永禄三年十二月廿四日没
          - 千歳　早世
          - 義久（よしひさ）　右衛門督　慶長十五年八月廿八日没
          - 倫久
          - 秀久

山名氏は黒住教であったので、『奉齋靈名簿（明治三十年二月改）』によって調べると、「一代、山名源七郎豊通比古　永禄六年三月十二日歿」と記されている。山名氏は源七郎死去の日をこの日として供養してきたのである。

山名源次郎は大正二年四月六日、七十四歳で歿しているが、黒住教の信者であり、勝見教会所（気高郡気高町勝見）の第三代所長を勤めている。しかし、同家は昭和四十七年七月改宗して曹洞宗に転じた。

山名氏略系図

- 時氏
  - 長男 師義
    - 義幸（伯耆の守護）
      - 満幸
        - 氏幸
          - 熙之
            - 教之
              - 政之
                - 澄之
  - 三男（因幡の守護） 氏冬
  - 四男（丹波の守護） 氏清
  - 五男（但馬の守護） 時義
    - 氏幸
    - 時熙
      - 持豊（宗全）
        - 勝豊
        - 教豊
          - 政豊
            - 誠豊
            - 致豊
              - 祐豊
              - 豊定
                - 豊數
                - 豊國
              - 豊範
                - 豊弘
  - 八男 氏重
    - 岩常ニ上山城
    - 三男（因幡の守護） 氏冬
      - 氏家
        - 熙貫 ═ 勝豊
          - 布施天神山城
          - 豊時
            - 豊頼
              - 誠通（久通）
                - 久松山に出城築
                - 弥次郎
                - 源七郎
                - 豊定
                - 豊數
                - 豊國
                - 鳥取久松山城
            - 豊重
              - 豊治

〝戦国〟を生き抜いた最後の守護

――運命に翻弄された山名豊国――

作家　鷲見貞雄

一　多治見峠で弥二郎憤死

（一）

因幡守護山名誠通の嫡男源七郎豊成は、鳥取城の武田高信が執拗にくり返す布施屋形の天神山攻撃に、いったん後退して陣容を立て直す魂胆もあって、後見人の山名豊数とともに鹿野へ逃亡した。

豊数は但馬の山名惣領家から派遣された因幡の守護代（系図では守護）で源七郎の後見人だったが、生まれつきの病弱とたび重なる防戦に疲れ果て、鹿野にたどり着くと間もなく臨終の床に就いた。

その鹿野には、誠通が因幡守護だった頃から、布施屋形に協力してきた尼子の残党を中心とする鹿野衆がいた。源七郎は父の誼を頼って戦力の補強に期待をかけ、衆団の頭領と武田攻略の作戦を練った。

しかしこのとき、鹿野衆の内幕は表向き源七郎に好意を示しながら、毛利方に荷担する伯耆羽衣石の南条元次や、武田高信と結ぶ志加奴入道の遺子らがおり、特に近ごろになって高信の繰り出す隠密活動によって、山名離反の動きが底を流れていた。

そんな雰囲気のなかで豊数が病死すると、にわかに源七郎の人柄を誠通の後継守護にふさわしい大器であるなどと持ち上げ、連日のように酒色の宴席を設けて、ついには因幡随一の美女とささやかれる高信縁故の女を側女に据えて、源七郎を骨抜きにしようと考えた。こうして高信の思う壷に填まった源七郎は、

二十四歳の若さには勝てず美女の色香にうつつを抜かし、側衆の気づかぬうちに高信差し回しの山伏によって毒殺された。

（二）

源七郎急死の報が布施屋形の本陣にもたらされると、源七郎の実弟弥二郎豊次は歯ぎしりして口惜しがり、譜代の家老森下出羽らの決起を促した。

「このままでは布施屋形は滅亡だ。無為にして座死するは愚の骨頂。直ちに鵯尾の城と、蔵田に布陣の武田軍を蹴散らしてくれよう」

勢い込む弥二郎の言葉に、森下出羽は壮年の齢に似合わず

「そう、急きたて召さるな。戦はわが屋形の死活存亡のわかれ道になります。よくよく熟慮せねば…」

「今更、何を言う。兵は勝つことを貴ぶと孫子も言っとるではないか。戦には兵の士気を鼓舞して前進することが先決…」

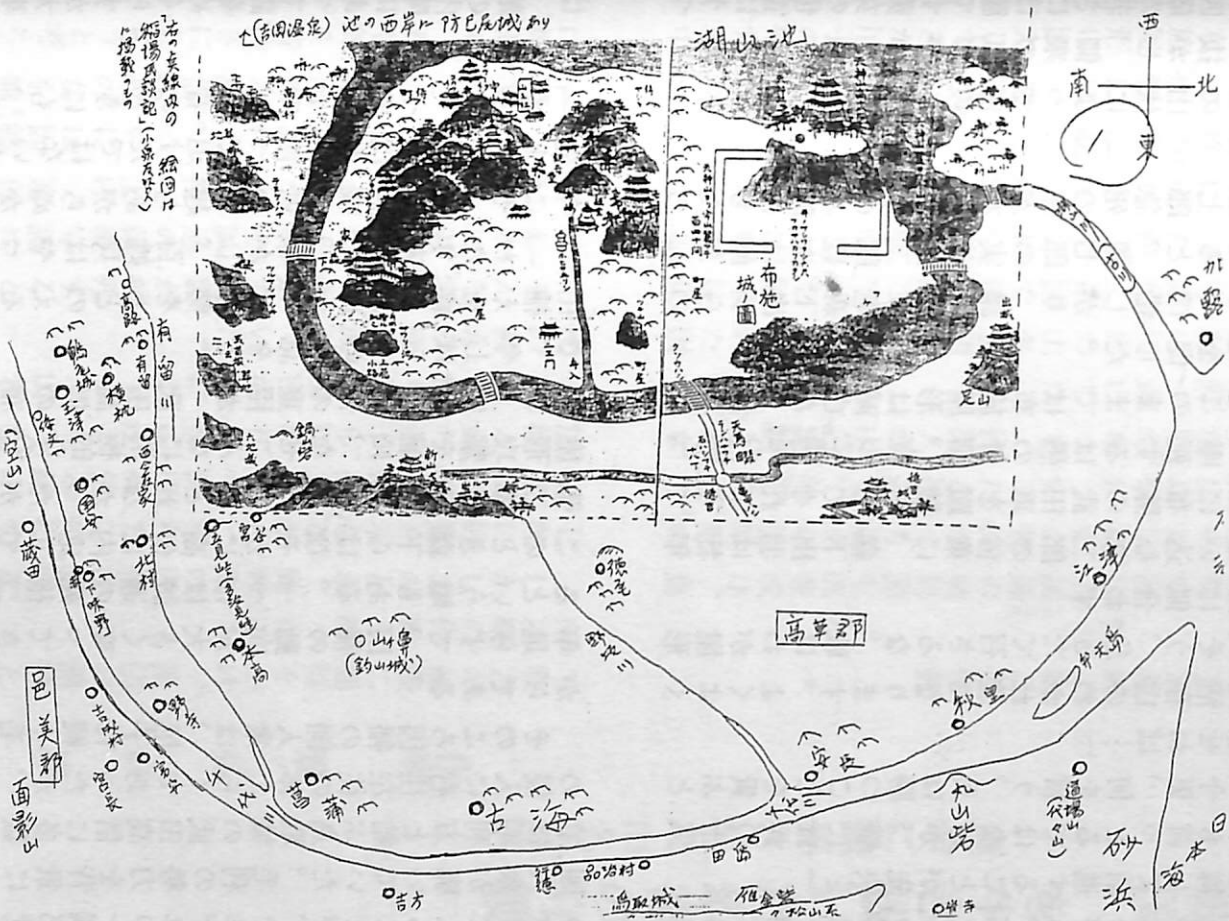
「しかしながら、寡をもって衆を制するには、敵の内陣にあって謀をめぐらすが大事かと…」

「そちは、その調子で、兄者のときにも、機先を削ぐことばかり言って退けたではないか、今こそ、弔い合戦と思って起ちあがらぬか」

「わかり申した。しかし、百姓兵はやっと田植えを終えたばかり、態勢をととのえるまで、今しばらくの休息を…」

森下出羽ら譜代の重臣が、武田高信の布施屋形攻撃を前に、なぜこんなに消極的なのか、弥二郎はその裏までは読みとれなかったが、このとき森下らはひそかに高信に内応しているという噂もある。一つには誠通の死後二十年足らずで、因幡の動向が大きく変ってきたからである。

そのころ因幡の国人衆は、尼子に続く毛利の侵入に右往左往の体たらくであったが、今では毛利方と結ぶ鳥取城の武田高信に多数の国人衆が靡いていた。毛利の勢力を背景にその傘下に入ることが、それぞれの一族郎党の


西
南
北
東
布施城図
高草郡
邑美郡
砂浜
日本海
古海
有留
歳田
面影山
鳥取城
鷹金城
丸山砦
(釣山城)
(道場山)
(空山)

くらしと領地の安堵につながると考えたからである。

そんな国人衆の動きと胸のうちを知っていた森下らにしてみれば、尼子最後の拠点と思われた鹿野衆にさえ毛利の手が伸びており、豊数存命の頃までは、布施屋形の安定圏と思われていた千代川以東の邑美郡や八東郡まで、今や高信の略奪的勢力下におかれてしまったのである。さらに高信の弟武田又三郎は高草郡の心臓部に迫る玉津の鵜尾城に居据っている。布施屋形はまさに孤立無援、このままでは鳥取城の武田に併呑されてしまう。

それに今は但馬の山名惣領家も、秀吉勢に押されて布施の応援どころではない。かえって武田を支援するかのように、惣領家から出石の崇鏡寺座主だった東揚禅師を還俗させて、二上山城に据えたと思うと新しく道竹城に移らせて三上兵庫と名乗らせたりした。いずれも高信の差し金で惣領家が黙認していたことを森下出羽は知っていた。

このように力を蓄えた武田高信は、誠通が因幡守護として布施屋形に入部した頃、安芸の国から父駿河守とともに客分として布施にやって来た。何年かたって誠通の意向で鳥取城在番に据えられたが、誠通の死後、布施屋形の空白に乗じて因幡東部を支配する鳥取城の守将となった。

安芸の守護武田一族という毛並の良さと実力の積み重ねで、因幡の国人衆が靡いてくると、高信は布施屋形の旧臣を調略して自分が因幡の守護大名になり得ると考えたのである。

その間、但馬の惣領家から山名豊定、豊数父子が、誠通の遺児後見で因幡守護代（系図は守護）として赴任して来たが、高信と国人衆の関係は変らず、しばらく静観して好機到来を待っていた。それが豊数の病死と源七郎の横死によって高信の野望を元気づけた。残る弥二郎を討伐すれば因幡国は自分のもの。

その自信が、いよいよ最後的決戦を挑む構えとなって、武田菱の旗指物を背に進軍、千

代川を渡って赤池に布陣するところまで迫ってきたのである。

（三）

天神山の天守櫓に上って、はるか久松山前方の青田に続く南の面影山や空山の丘稜地帯を眺望していた弥二郎は、傍らに侍る森下らに

「手薄になった釣山の出城まで武田の尖兵が迫っているというではないか。高信の本隊が千代川を渡って来ぬうち、先手を打って、赤池までわが軍を進めさせえ」

弥二郎の命令に翌朝、騎馬の武者や徒の足軽隊が勢揃いした。後詰を受け持つ森下出羽や中村大炊らも武装して整列した。

やがて天神山から一列縦隊に降りた弓と槍の足軽隊は、山麓の広場に列ぶと若武者を先頭に、天馬駿を小走りに鍋山の砦へ登って行った。

馬から降りた弥二郎は、砦の上に築かれた物見櫓に登って東へ視線を向けた途端、我とわが目を疑った。一里足らずの釣山城周辺は、武田菱の紋所を染め抜いた旗指物に取り囲まれ、更に一隊は多治見峠を目ざして進撃しているのである。前の日に天神山城の物見櫓で見た状況とは急変しているのである。

「遅かった！」

弥二郎は歯ぎしりして地団駄を踏み、大声をあげて

「武田勢を多治見峠に入れるな。誰か、援軍の伝令に走ってくれ。一人は天神山の森下に、一刻も早く後詰の兵を寄越すように。もう一人は足山と徳吉に援軍を頼むよう急いでくれえ。今一人は新山城の守りを堅固にするよう、しかと伝えよ」

命令一下、黒装束の伝令が走り去った。

そのうちにも千代川を渡って進軍してくる武田高信の軍勢は、今まで見たこともない装備と新戦術の展開である。毛利方から送られた二十挺の火縄銃を横列びに、その前列を進む長槍の足軽隊が騎馬武者の指揮によって、赤池の下から田圃の畦道を多治見峠に向って

来るのである。
釣山城は落城寸前にある。
弥二郎は焦りに似た感情を抑えることが出来ず
「続け！」
と叫ぶと、自ら馬を蹴って鍋山を駈け降り、多治見峠を目ざして宮谷に向った。それに続いて足軽隊がパラパラと駆けて行った。が森下ら多数の将兵は、作戦が伝達されぬまま勢い込んで飛び出した弥二郎に従って前進したものの、戦闘体形に入る動きではなかった。
源七郎が鹿野で横死の情報が伝えられた頃から、足軽兵の間には布施屋形の敗北が取り沙汰されていたので、田植えがすんで農閑期の出稼ぎくらいに考える百姓兵には、命を賭ける戦いなどあり得ない。
弥二郎の一隊が峠の入口に駈けつけたときには、敵軍は更に膨れあがって、武田又三郎の二百に余る援軍が、鵜尾の城から横枕ー北村ー本高と多治見峠の地蔵堂まで迫っていたのである。
宮谷からすぐ裏の山道を登った弥二郎と側衆の兵は、中腹から見おろす武田軍の鶴翼に似た兵の配置に、まともな交戦は出来ないと見てとった。案の定、後続の兵がたどり着いたけれども、目の前の大軍を見ただけで森下らの兵は戦意を削がれて鍋山へ退却をはじめた。
その兵を目がけて、武田軍の矢が中空を飛んでゆく。弥二郎が叱咤すれども聞かばこそ、逆に森下出羽の「ここは退却召されえ」と叫ぶ声を聞いたときには、弥二郎と側衆の三人は取り残されて武田の兵に囲まれていた。側衆は群がる敵兵の中に跳り込んで斬り伏せられた。
弥二郎は布施屋形の将兵の腑甲斐なさをのしりながら、斬ってかかる何人かの敵兵を斬り捨てて峠の麓に駆け降りると、黒松と櫟の窪地に端坐して、草摺と腹巻を取り外し、鎧直垂の袴をずらして切腹した。そのとき弥二郎が臨終に何を言い遺したか、誰も聞いたものは居なかった。

二　孤城天神山に入る山名豊国

（一）

山名弥二郎豊次が多治見峠で憤死したとき、山名豊国が何処にいたか正確な記録はない。岩常の二上山城にいたとか、但馬にいたとか、あるいは京都や比叡山にいたなど後世の伝説的記録はあるが、確かな所在はわからない。

本来なら兄の豊数が病死したとき、亡兄の後を継いで因幡の守護代になる人物だし、源七郎が毒殺されたら弟弥二郎の後見人になるべきところである。それを所在不明にしているのは、わかれば消されるかも知れないし、あるいは元服までが長引いて、そのまま但馬の惣領家に足留めされていたのかも知れない。

そのうち生野銀山を抱える但馬国が西進する織田勢の秀吉に蚕食されだしたので、惣領家の山名祐豊に協力したり、但馬二方郡の長井城主長氏の娘（山名家譜では祐豊の娘）を正式に娶るなど二十三歳まで但馬に居すわってしまうのである。豊数につづく因幡の守護代に就くのを忘れたような長い但馬の時間だったが、妻を迎えたとき豊国に天啓のようなひらめきがよぎった。

豊国の嫁取りに布施屋形の旧臣が同意したという書状を見た豊国は、自分を布施屋形の後継に決めている旧臣の心情に感激、急遽、思い出したように山名惣領家に出入りする塩冶某に船を出してもらうと、側衆の数名を従えて、布施の天神山を目ざして出航した。天啓というのは布施屋形に入ることだった。

出石川から円山川を経て日本海に出た船は、加露の千代川河口を小山・溝ノ口に沿う古川に入って湖山池に出ると、すぐ天神山城北岸の船着場に繋留。やがて船から上った豊国一行は搦め手の道を城にのぼって行った。

「なつかしいのう。兄者が存命のとき、一度ここの天守にのぼったことがあったが…」

豊国は側衆を顧みて独りごとのように言った。たび重なる戦いに、天神山城の建物は崩れたものや仮屋など目に泌みたが、天神山の南

麓から卯山に続く湖山池に沿う土手や船着場は、誠通時代そのままのたたずまいである。

この一帯から山頂に出ると、東側の凹部にある山名時氏勧請の日吉神社や、南側の寺院に三重塔、さらに南東の端には、荒壁塀の長い正木ケ鼻の屋敷もそのまま残されている。

卯山の神社参道の石畳がとぎれる天馬啜から見ると、馬蹄型の山容は北方に高く因幡一の大きな前方後円墳が楓の林に覆われて、古代の宮廷に奉仕した語り部を都に送った豪族の歴史を語っている。

（二）

旧臣団に迎えられて屋形に入った豊国は、あらためて旧臣たちの真意を確かめると、武田高信に内通していた一部の者も、今は新しく迎えたお屋形様に忠誠を誓うのみ、と異口同音に答え、特に森下出羽は進んで誓いの盃まで交わした。

その盃を旧臣たちに回しているうち、その話題になったのは、過ぐる年、豊国が山名惣領家の名代として二上山の実情を視察したとき、山頂の城壁近くの闇の中で、斬りかかった毛利方の曲者六人を叩き斬ったという逸話だった。そんな話が豊国への信頼に繋がっている強者礼讃の単純な論理に、豊国は苦笑したが、そのような出来事に頼母しがられるほど、豊国は大兵で剛の者という印象を強くする偉丈夫であった。

豊国は何も言わなかったが、この単純な理屈が集団の意向となり、国人衆のような領民と百姓兵を抱える立場になると、強者礼讃の理屈から、昨日の敵はきょうの友、きょうの友があすは敵、という変節に似た動揺の繰り返しが続くことを、豊国は但馬にいた成年期の見聞で体得した。

特に平穏だった因幡国は、尼子と毛利の軍勢が一再ならず、三たび四たびと繰り返し侵入するたびに、国人衆は尼子に荷担したり毛利に靡いたり、又再び尼子に従いたり毛利に加担したり、風にゆれる葦のごとく揺れ動い

てきた。家名の誇りをもって抵抗した国人衆は滅亡し、再び起ち上る機会に恵まれなかった。

下剋上のはげしい畿内や東国とはいささか違う現象だが、一つには、どんなに揺れ動いても因幡国は山名守護が治める所という伝統的信頼感と保守性が、因幡の風土となっていたのかも知れない。

もともと因幡国は山陰の僻辺にあって目立つ穀倉地帯もなく、したがって外来勢力が犠牲を払って入り込むほどのこともなかった土地柄だが、それゆえに建武新政に始まる新たなる守護制度で、因幡の守護に山名時氏が任命されてから豊国まで、十七代持続という日本でも稀にみる連綿たる氏族の継承地である。

南北朝争乱のなかでそれが始動したのは、山名氏が足利尊氏と先祖を同じくする源氏の系累であるということと、時氏に十七男五女という恵まれた子孫継承の血脈が、やがて十一か国の分国支配の守護に分散されて六分一殿と称えられるほどの有力武将だったからである。

その血脈的勢力が足利三代将軍義満の疑心暗鬼を誘い、巧みな謀議に踊る山名氏内紛の葛藤になるのである。その流れが応仁の乱を惹き起す動機にもなり、徳政一揆や下剋上の風潮を盛りあげる戦国時代へと突入する。

その間にも、各領国の守護だった山名一族は、新しく抬頭した国人衆や戦国大名の出現によって、領国を追われるもの、維持するものなど衰えをみせるが、山名宗全の全盛期を峠に再び下降線をたどる。

その線上に豊国を終点とする因幡守護の命脈を辿ると、時氏の三男氏冬が二代目の因幡守護になって五代まで継承するが、三代目はなぜか時氏八男の氏重が継いでいる。そして六代目を但馬の惣領家持豊（宗全）の次男勝豊が因幡守護を継承して以後、この系統がやがて山名氏の本流となり豊国に繋がる。

その中で七代目と九代目が伯耆守護家の系統に移ったり、時氏の十三男高義の嫡孫に継

がれたりしている。

（三）

それはさておき、山名の守護十七代継承という因幡国の安定性は、但馬の背景があるにしても、山陰の山と川と静かな大自然の恵みの中で、培われた庶民大衆と国人衆の平和志向を無視することは出来ない。近隣を殺戮してまで領地を強奪することを考えない因幡の国びとの前に、二万の大軍を擁して最初に侵入したのが尼子晴久で、各地の国人衆が降伏したので足利十三代将軍義輝は、晴久を因幡守護に補任した。が晴久は母の危篤で間もなく出雲に帰ると急死、嫡男義久も毛利・吉川の攻撃と内紛で滅亡、一族の尼子勝久・山中鹿介らは逃亡した。

その尼子に替って因幡に侵入するのが吉川元春で、彼は早くから伯耆では先着の尼子と競合していたが、尼子滅亡のあとは石見・出雲・隠岐・伯耆は完全に毛利・吉川の制圧下にあった。因幡の各地で尼子側の勢力を一掃すると、元春は鳥取城に入って守将武田高信と盟約、毛利側の軍監久芳兵庫允を高信の補導役を兼ねる城番に据えて出雲へ引き揚げた。

このような経過と時代背景のもとに、豊国が布施屋形に居据って間もなく、浦富の桐山城に布陣したばかりの山中鹿介から一通の書状が届けられた。忍の者がもたらした鹿介の文面は、桐山城在陣の尼子勢を国府の甑山砦まで進出させ、鳥取城の武田高信と毛利勢力を追放する所存だから直ちに共同作戦をとられよ、という趣旨である。豊国は雀躍した。元亀三年（一、五七二）八月のことである。

三　高信の追放と豊国の鳥取入城

――尼子・毛利両勢力の狭間で展開

（一）

ここで出雲の山中鹿介が、どんな経過をたどって因幡の東部に入って来たかを探ると、若くして波瀾万丈の人生航路を生き抜いた超

人的な鹿介は、かつて毛利元就の手練手管に乗って内紛の果て滅亡した尼子の残党。そのため悲願の尼子再興を双肩に荷って最後の嫡男（新宮党）尼子勝久の参謀として元亀二年、我武者羅（がむしゃら）に伯耆へ侵入したが、毛利の大軍に阻まれて敗退、鹿介は捕えられて尾高城の牢に入れられた。そのとき下痢と称して番兵を騙し、便所の汲取口から逃亡、日吉津（ひえず）の港から舟を仕立てて丹後へ遁走した。そのあと近国の浦々で海賊濫妨の歳月を過したと記録にある。

その鹿介からの武田高信追放作戦の誘いに、まとまった兵力を持たない山名豊国は千載一過の好機とばかり喜んで鹿介と結ぶが、しかし現実に因幡の実力者となっている高信に対して、闘いの正面に立つことは躊躇（ためら）われた。

そんなとき国府の甑山まで出陣して鳥取城の武田追い出し作戦を耳にした高信は烈火のごとく憤激、

「毛利に敗れて、身の置き所なき尼子の残党が、小癪な眞似をするか、目にもの見せてくれるわっ！」

と五百の兵をととのえると先手を打って甑山へ進軍した。その日は八月一日のことで、未明から繰り展げられた戦いの結果は、勢い込んだ高信の敗退に終った。地元で伝える〝たのも崩れ〟の戦いである。

それに追い打ちをかけるように、毛利方の指示によって高信は備前に出陣。そのため鳥取城の守備が手薄になった虚に乗じて豊国は、その頃再び鳥取入りした鹿介らの援護に呼応して、布施屋形から家臣団を従えて因幡東部の国人衆を説得して回った。

そのとき尼子勝久をかつぐ鹿介らの軍勢は騎虎の勢いで法美、邑美、八東郡と千代川東部の武田勢力圏に入って破竹の進撃を続けた。毛利方に靡いていた国人衆はまたたく間に尼子方に寝返りを打った。高信は弟の鵜尾（ひとりお）城主武田又三郎を頼って落ちのび、再起のチャンスを待つことになった。

豊国と勝久が鳥取城に入った直後、因幡戦乱の情報をキャッチした毛利方では、小早川隆景が伯耆の尾高城主杉原盛重や羽衣石の南条城主らに、鳥取に援軍を急派するよう要請した。しかし高信はすでに鵜尾に遁走して因幡の要地は尼子勢に占められていたので、僅かばかりの援軍は戦わずして引揚げた。

そこで吉川元春は出雲の軍兵を動員して本格的な鳥取攻略の軍を進め、各地の尼子方城番を駆逐した。鳥取城では勝久が城から脱走すると豊国は呆気なく元春に降伏した。

このとき元春は豊国の態度が無抵抗であり、森下・中村ら重臣が毛利方に内通していた経過を考え、豊国から降伏の誓いを取りつけると毛利の軍監を城番に置くことにして、因幡の統治は豊国に任せ、人質を取るだけという寛大な処分にした。人質は旧臣の中村、塩冶、山口らの子弟だった。

元春のこの措置を側近は、元春が長いあいだ戦陣で書き続けてきた『太平記』の模写が終る頃だから、武辺ひと筋でない一面を豊国に示したかったのだろうと推測した。が元春の真意は、西但馬に迫っている織田勢力の傘下にある但馬山名の出動を避けたかったのである。こうして元春は長陣は無用と天正二年十二月出雲へ引揚げた。

ところが吉川元春が因幡に在陣中の二年三月、尼子方の亀井新十郎と鵜尾城主の武田又三郎は七百騎を従えて鹿野を攻略し、続いて九月には尼子勝久・鹿介・立原久綱らの軍勢三千五百人が鳥取城を攻撃、毛利方の城番毛利入道浄意を降して開城、勝久が城主に据った。豊国は戦渦を避けて城外に避難した。

その頃の因幡国内は、吉川元春と尼子勝久両勢力が一進一退の戦いを続け、その狭間にあって国人衆や城番は複雑怪奇な動きに終始している。敵味方入り乱れての戦いがあったり、服従したり寝返ったり、面従腹背、まさ

に〝叛服常なき〟混乱の坩堝にあった。

が兎に角、元春が出雲に引揚げ、尼子勝久が鳥取城に据ってしまうと、因幡の大半は尼子の勢力下に固まろうとしていた。そんな状況の中で豊国は、鳥取城返還を勝久に要求した。が勝久は簡単に応じなかった。そこで豊国は開き直って

「鳥取の城は豊国の端城である。返還されれば、自分は毛利氏との約束はなかったことにして尼子勢に協力し、伯耆国へ出兵もしよう。もし返還なきときは、但馬の山名祐豊と相談して尼子氏を攻撃する」

半ば威嚇的な言いようだったが勝久ら首脳は、但馬山名の背後にある織田勢力を意識して豊国と妥協した。その結果、豊国に鳥取城の半分を譲って勝久自身は二ノ郭に居据ることになった。

これで豊国は鳥取城を奪還したつもりになったが、しかし勝久・鹿介の勢力が因幡の大半を制圧している以上、豊国の因幡支配は画餅に終ると考えた豊国は、但馬山名と合議のうえ出雲の元春に尼子退治のため来援を要請した。このあたりから豊国の智謀が発揮され、巧みな駆け引きで尼子・毛利の両勢力を利用して、豊国の戦国大名への足がかりを作ろうとする気配がうかがわれる。

（二）

天正三年八月、元春は小早川隆景の軍勢と共に安芸を出発するが、数え切れない大軍を擁して因幡入りをする魂胆は、豊国の救護要請に応えると見せて実は毛利の中国制覇を妨げる尼子勢力の掃蕩にあった。

九月に入る早々、吉川・小早川の先鉾隊は千代川まで迫ったので、豊国はこの大軍を迎え入れるため二千余の兵を千代川の磧に繰り出して舟橋を架けた。

こうして九月三日から電撃的に因幡東部の尼子掃蕩作戦が展開されたので、勝久らは鳥取城を捨てて若桜鬼ケ城に走り、鹿野城の亀井

新十郎はいち早く国境の峠を越えて撤退した。

毛利勢の主力は時を移さず因幡の要地を攻撃したので、各地の国人衆は又もや毛利の軍門に降った。しかし若桜鬼ケ城に籠る勝久らの本隊は、戦術に長けた鹿介や立原らの抗戦で数十日の時を費しても陥落せぬまま、毛利軍は鬼ケ城近くに尼子勢監視の相城を築いて少数の兵を残し、十月に入ると小早川隆景、次いで吉川元春の軍勢も因幡から引揚げた。織田軍が西播磨・備前に侵入するという情報が届いたからである。

このとき鹿介は、吉川・小早川連合軍に敗れたとはいえ、三千五百の尼子勢の損傷はそれほどでないと踏んでいたし、余力のあるうちに尼子再興のため一旗あげたいと考えていた。そこで念のため豊国に甑山出陣以来の友好関係を説いて、山名家の重臣に自分達を加えるかどうか確かめると、豊国は黙して語らなかったが、譜代の重臣を自任する森下・中村らが反対した。

「これで肚が決まった」と鹿介はつぶやくと、今は因幡国に未練もなく、尼子勢を従えて京都へ出た。そのとき因幡に残った一部の兵は鹿野に行って、尼子の残党と共に鷲峰山麓の開拓に入った。

こうして京都に出た勝久・鹿介らは信長に面謁、初め明智光秀に所属したが、のち秀吉に属してその第一線を承けると、上月城に尼子再興の夢をかけるのである。

（三）

さて、尼子勢も去り、吉川・小早川も引揚げた因幡国は、毛利勢力の傘下にあったが、平穏な時が流れた。有力な国人衆も豊国に同調した。そして一年がたち二年が過ぎた頃、豊国は毛利の傘下にあることの安定感に、あぐらをかいていていいかどうかに迷いはじめた。

反抗の意図がなければ毛利の威圧もないし、軍監の存在もなきに等しい。しかし、このままでは因幡国守護として君臨した名門山名の、豊国をもって十七代を継承する現状は余りに

自主性に欠けるのではないか。今は因幡国を統べる戦国大名として領国の国人衆に因幡一円の統治を宣明せねばならぬときである。

そう考えると豊国は、同じ毛利の傘下にある武田高信・又三郎兄弟に寝込みを襲われる心配はないとしても、尼子と豊国の連合軍に鳥取城を追い出された高信には恨みが残っているだろう。いつ何を起こすかわからぬ以上は、豊国のほうから進んで不安の芽を芟除しておこう、と豊国はある日、謀略をめぐらして高信を散岐の大義寺に誘い出すのである。

このとき豊国は、「智頭の淀山城に草刈景継討伐の軍を進めたいので、高信殿も兵を動員して御協力願いたい。そのため作戦の軍議を開きたいので大義寺まで赴かれたい」と書状を送った。

高信は何の疑いもなく側衆を連れて鵜尾の陣屋を出ると大義寺に赴いたが、豊国は騎馬の家臣を従えて寺に入ると、いきなり高信を斬り伏せた。素早い豊国の決断だった。

そんなとき、上月城陥落の報が豊国の許に届いた。

四　和戦の狭間に立つ鳥取城

——秀吉に降る豊国と経家を迎える重臣層

（一）

上月城で尼子一党が潰滅したのである。豊国はグッと胸のつまる思いがした。尼子再興の悲願が鳥取で果たされなかった勝久・鹿介らの軍団は、上月城を最後の砦として秀吉の第一線を承けて一進一退のあと、しばらく守将に据っていた。が備前の宇喜多直家を先頭に、毛利輝元・小早川隆景軍の巻き返し作戦によって落城、勝久は自刃した。

そのとき鹿介は勝久の遺言を守って、あくまで尼子再興の悲願をかけて百姓兵に変装、ひそかに城を抜け出たが山麓で逮捕された。そのあと縛られたまま安芸の毛利本営に護送される途中、高梁川の阿井ノ渡しで備中松山城主天野配下の刺客に暗殺された。

鹿介の不遇な死にざまを知った豊国は、なぜか非凡な鹿介との出会いといい、戦いを共にした経過など一期一会の因縁めいたものを感じた。かつて生地の出石の菩提寺総持寺で何とか禅師から聞いた説教の〝人生と一期一会〟を思い出したのである。

そのとき豊国はふっと「鳥取も危い！」と予兆めいたものを感じた。

上月城が毛利勢の手中に収められたとはいえ、三木城攻略がすめば秀吉軍は上月城攻略に向うだろうし、但馬ではすでに秀吉の弟秀長が竹田城の守将だし、豊岡城には宮部継潤が城主に居据っている。但馬の四天王といわれた国人衆も秀吉に降伏した。

但馬海岸に根を張っていた奈佐日本之助や諸寄の芦屋城主塩冶周防守らも最近毛利水軍に属して因幡へ逃げている。山名四天王で但馬守護代の垣屋兄弟も織田方と毛利方とに別れて、弟の隠岐守が因幡入りをすると、鹿介の居城だった浦富の桐山城に陣を構えた。

天正八年に入ると、春の田植えが終れば秀吉の大軍が因幡へ侵入するだろう、と具体的な情報も伝えられた。毛利勢の大半は九州の大友宗麟、竜造寺、秋月らとの戦いに奪われている。それに山陽各地の守りもある。鳥取への援軍は覚束ないのではないか、と豊国は毛利一辺倒の不安にかられた。老練な森下家老は、非常時の防戦に百姓兵を狩り集めることを豊国に進言して、吉川元春へ書状をしたためた。

（二）

五月十六日、うわさの通り秀吉の大軍団は各隊とも若武者を先頭に、淀山城（智頭）を攻める物見峠・黒尾峠・志戸坂峠、鬼ケ城（若桜）に向う戸倉峠・若杉峠、北山城（丹比）に進む小代峠・氷ノ山越え、山崎城（成器）に向う蒲生峠など中国山地のけもの道まで突破して因幡国に侵入した。秀吉の第一次鳥取城攻略戦である。

作州路から因幡に進入した秀吉の本隊は、淀山城の草刈重継を攻略すると、千代川の下流に沿うように景石城の用瀬某や国人衆を降して霊石山（河原）に兵を進めた。ここには由緒ある最勝寺が十指に余る堂塔伽藍で寺城をつくっている。むかし梶原景時に追われた蒲冠者源範頼が亡命したという伝説の寺で、いつも僧兵や落武者がたむろしている。

この霊石山から空山（そらやま）に続く丘陵地帯に入ると一隊は山の斜面に休息した。

そのとき秀吉は、はるか日本海に沿う広い砂浜を一望し、蛇行する千代川右岸の西から東にかけて北風を防ぐ天然の屏風（びょうぶ）になっている久松山系を眺望しながら、山頂の天守閣と中腹の城砦をみて、容易に落ちる山城でないと直感した。

それに千代川の西に広がる青田の平野は、まさに因幡の穀倉地帯である。その西端の湖山池畔には山名豊国の布施屋形だった天神山が見える。

このとき秀吉の脳裏には、三木城攻めの経験から秋の収穫米を高値で買い漁る思いが走った。姫路に帰ったらさっそく信長に進言して、因幡の米穀買い占めに泉州堺の納屋衆（なやしゅう）を動員してもらおう。秀吉の頭には、もう来年の農閑期に本格的な鳥取城攻略というシナリオが描かれていたのである。

やがて秀吉の本隊は、空山を降りると面影山麓を通過して鳥取城外の吉方に本陣を構えた。そのとき各地の戦況がもたらされた。戸倉峠を進軍した荒木平太夫が若桜の鬼ケ城を攻略したこと、鹿野に向った亀井新十郎が尼子の残党と合力して毛利派遣の近藤豊後守を調略したこと、そのとき近藤らは人質にしていた山名豊国の娘や森下出羽、中村大炊ら重臣の娘を解放して芸州に逃げ帰ったという。

そのあとも秀吉の軍団は国人衆を抑えて因幡六郡をあらかた平定したので、秀吉は鹿野城主に亀井を据え、用瀬の景石城に磯部兵部、若桜鬼ケ城に荒木平太夫と八木豊信、私部城

に但馬の山名氏政、岩常城（二上山）に垣屋播磨守を置いて国人衆の制圧と毛利勢の反撃に備えた。残るは鳥取城主の山名との対決である。

（三）

鳥取城の近くまで駒を進めた秀吉は、このとき亀井が鹿野から連行した豊国以下重臣の娘を楯に

「降伏すれば因幡国は安堵する。さもなければ、この人質を磔刑に処す」

秀吉の交渉は脅しである。森下・中村らは毛利の援軍が来るまで時をかせごうと考えていたが、豊国は秀吉の上月城攻略にみせた罪なき婦女子・幼児ら二百十余人の磔刑と串刺しの惨虐処刑を、山中鹿介の書状で知っていたので、「ここは秀吉に降伏するに如かず」と主張した。

城内の方針が決まらず二日目を迎えた。しびれを切らした秀吉は、遂に最後通告と同時に即刻回答に及ばなかった森下と中村の娘を磔にして槍で突き刺した。次は豊国の娘を処刑する番である。そのとき苦渋に満ちた豊国は、「待て、羽柴殿の言われる通りにいたそう」と言って秀吉の軍門に降った。

ところが秀吉は「返答が遅すぎる」と言って、娘の処刑は思いとどまったが〝因幡一国安堵〟の前言を捨てて、鳥取城地の二郡だけ豊国に与えて姫路に引き揚げた。元春の援軍到着前に豊国が呑んだ秀吉の和平案である。

その直後、森下・中村らの重臣は、自分たちの娘が処刑されているのに「余りに無節操、余りに腑甲斐ない主君」と怒りをあらわにして、八月二十一日豊国を鳥取城から追い出した。豊国は妻子らを伴って播州姫路に赴いたという。（『隠徳太平記』）

このあたりから第二次鳥取攻略の一年近くというものは、文献資料や古文書によって諸説まちまちである。豊国も国人衆も、秀吉に降伏したと思うと掌を返すように毛利側に寝返ったり、亀井や磯部らの巻返しに逢うとまた秀吉に靡いたり去就が定まらない。

豊国が退去不在と思われる九月二十一日、吉川元春は豊国と交渉の結果、鳥取城を請け取って城番に牛尾春重を据えているが、注目されるのは元春の「鳥取城を請け取り織田勢の防衛に当たらせる」旨の書状を備後鞆の足利義昭に出していることである。毛利一門の東進上洛の背後に義昭が動いていることがわかる。

さて、森下出羽ら旧臣の「吉川一門の然るべき武将を鳥取城主に迎えたい」という強い要求に、元春は翌九年三月石州福光城主吉川経安と協議の結果、嫡男経家を鳥取城番として派遣することになった。経安は嫡男の派遣に消極的だったが仕方なく元春の言に従って山縣築後、森脇春定、今田孫十郎ら将兵三百余名の門出を見送った。

こうして三月十八日、海路を城外の加露港に着くと経家一行は鳥取城に入った。このとき経家が真っ先に目をつけたのは米蔵である。遠からず攻撃をしかけて来る秀吉の大軍に対して城方の兵は俄かに狩り出した百姓兵を入れても三千人。しかもその糊口を養う米は二か月に足りない。これから決戦に臨む経家の心は暗かった。

去年の冬から早春にかけて小浜から船団を組んで米の買い占めに来た堺の納屋衆が、三倍の高値で買い漁ったのである。この状況から経家は短期決戦を想定して山麓の整備や、雁金の砦、丸山砦を構築した。それからまもなく秀吉の第二次鳥取城攻略の幕が開かれた。

五　禅高と語る軍監高山右近

――鳥取城は〝渇え殺し〟で落城

（一）

「六月二十五日、羽柴筑前守秀吉　中国へ出勢、打立つ人数二万余騎。備前、美作打こし、但馬口より因幡国中へ乱入…」

（『信長公記』天正九年の条）

このとき姫路を出発した秀吉は、但馬にいた弟の秀長と打合せを済ますと、播磨街道に戻って秀吉本隊の先頭を進んだ。秀長、宮部

継潤らは、但馬国人衆らの軍勢を従えて但馬国境を因幡へ進入した。その中に仏門に入って禅高と名乗る豊国もいた。

秀吉の本隊は戸倉峠を越えて丹比から私都谷を国府街道に出ると、因幡一ノ宮の山裾を卯垣・源太夫山、さらに王寺谷の山道を帝釈山（本陣山）へ進んだ。ここは久松山の天守閣を指呼の間に看視できる所である。

大軍団の各隊は、去年通ったコースを作州の物見峠から東へ横列びに、播磨・但馬国境の峠を雪崩（なだれ）のように侵入した。その勢いで千代川沿いに霊石山麓に進んだ一隊は、鳥取城攻略の血祭りとばかり、最勝寺城に籠る落武者の二千人を焼き殺したという。

すべてが秀吉の作戦通りに進行し、去年攻略のとき据えた鹿野、用瀬、私都、若桜の守将も油断なく、そして兵はぬかりなく堺の納屋衆が買い占めた新米の貯蔵庫を、不寝番を置いて守備していた。

しかし海岸部は秀吉方の守備も手不足で、毛利水軍が伯耆の泊港に六十五隻の兵船を繋留すると、奈佐や塩冶配下の海賊衆が毛利のため思うように青谷、船磯、酒津など因幡の主要港を支配した。それに呼応して、勝見の観音寺山城の山名正久城主や奥沢見の樋城主も、経家と毛利水軍の接続役を引き受けた。

この状況に秀吉は、鳥取に入るとさっそく信長に伝令を出して、丹後に集結している織田水軍の出動を依頼した。田辺城主（西舞鶴）細川幽斉は宮津と舞鶴港の軍船を出動することにした。家老の松井康之が船団の指揮者として日本海を西へ出帆すると、またたく間に泊港に停泊中の毛利軍船六十五隻に火を放って潰滅させた。そのあと松井は加露の港に入って、鳥取落城まで毛利・吉川方の糧道を断つのである。

このような外角の動きと併行して、攻略軍の各隊は予定通り千代川を挟んで江津、秋里、安長のほか、鳥取城の正面を中心に久松山系を包囲した。南正面から東の大隣寺山下へか

けて湊川を掘って土を盛り、数町おきに櫓を組んでその間に柵を作り、城の兵が逼い出る隙間もない構えにした。

その上、長期戦の兵糧攻めを狙う秀吉は、櫓の要所々々に京都や堺の商人を招んで店を設け、小屋を作って遊女を抱え置くなど兵の乱暴狼藉を防ぐことにした。

十重、二十重に包囲された秀吉軍の二万余と鳥取城側の三千足らず。初めから勝負にならない戦であるが、吉川経家は元春の大軍と糧米の救援に望みをかけていた。

秀吉が帝釈山に本陣を構えて一か月余り、山麓や城外での小競り合いはあったが、本格的な戦いはなく、城兵は遥か加露の港を眺めながら溜息をついていた。

そのうち食糧も底をつき、城山の兎や狸、鼠や蛇の類まで生きものはすべて喰い、木の実、草の根も食いつくした。毎日のように餓死者が出るようになった。痩せこけた近郊の百姓兵は、雁金砦の柵を越えて逃げて行ったが、櫓の番兵は横を向いて見ぬふりをした。

そんなとき信長の名代として高山右近が、秀吉の陣中慰問と戦況査察のため鳥取城を訪れるのである。

（二）

『信長公記』の天正九年八月十四日の条に「御秘蔵の御馬三疋、羽柴筑前かたへ遣はされ候。御使高山右近。とっとり表懇に見及び、罷帰り言上候への趣上意にて、御馬ひかせ参陣…」

信長秘蔵の馬三頭を秀吉に与える。使者は高山右近。鳥取城の戦況をつぶさに見て、帰って報告せよという趣旨である。毛利・吉川・小早川の後詰の軍兵が大挙して、鳥取へ出陣するという噂が伝えられていたからである。戦況如何によっては信長自身が出陣せねばならぬ。右近の戦況査察は重大な意味をもっていた。

その戦況査察の大役に、キリシタン大名として知られた右近が選ばれたことはいかにも唐突であるが、もともと信長は、フランシス

コ・ザビエルが初めて日本に上陸布教のあと、相次いで来日したパードレ（神父）らに対するよき理解者だった。特に京都や安土における仏教とキリシタンの宗教論争では、ポルトガルの宣教師に軍配をあげたほどキリシタンに接近していた。

そんな関係もあって信長は、父の高山飛騨守と共に一風変わった若武者右近に注目、少年時代すでに洗礼を受けている右近の助言で、安土の城下に教会やセミナリヨ（神学校）を建てるなど信長の深層に迫るものがあった。

それに古代から権力をもつ仏教徒の専横は目に余るものがあり、仏教勢力を抑えるためにもキリシタンの利用が必要であった。冷厳な現実主義者の信長にとって、観念的な仏教よりキリシタンの教義に共感をおぼえる点が多かったのである。それが右近を起用することになったのだろう。

右近の船団は馬三頭のほか、兵糧を積み込んで若狭の小浜港を船出した。買占めた米があるといっても、二万という軍団の兵糧ともなれば大変な消費量である。雑兵の略奪暴行を防ぐ上からも、糧秣の補給は絶対欠かせない。治安を重んずる信長の意向を受けて右近は、船団に積めるだけの食糧を運んだのである。

加露の港に入った右近の船団は、千代川河口一帯を警備する松井康之の兵達によって、馬と食糧が陸揚げされると、食糧は加露と江津（守将浅野長政）と秋里（杉原家次）の各陣屋の米蔵に運び込まれた。それを見届けて右近は側近と馬三頭を連れて、千代川の浅瀬を渡ると秀吉の本陣山へ向った。

（三）

秀吉に会った右近は、絵図をもって説明を受ける間にも、陣屋に出入りする敏捷な若武者を見ると、秀吉同郷の加藤虎之助（清正）、福島市松（正則）、それに藤堂与右衛門（高虎）など秀吉と生死を共にする幌衆（ほろしゅう）である。

右近は本陣の外に出て絵図と見くらべながら、大きく包囲された山々の、四里から五里

に跨がる各陣屋を遠望して、秀吉の作戦の凄さに驚嘆した。

帝釈山のすぐ裏側には譜代衆と幌衆が詰めており、その続きの摺鉢山には桑山修理（重晴）、覚寺の摩尼寺奥ノ院に毛利方から寝返った垣屋隠岐守、土俗山に垣屋播磨守、昼食山に高野駿河守、そして久松山裏側の円護寺鼻の船形山には宮部継潤と少年お次（秀次）という布陣である。

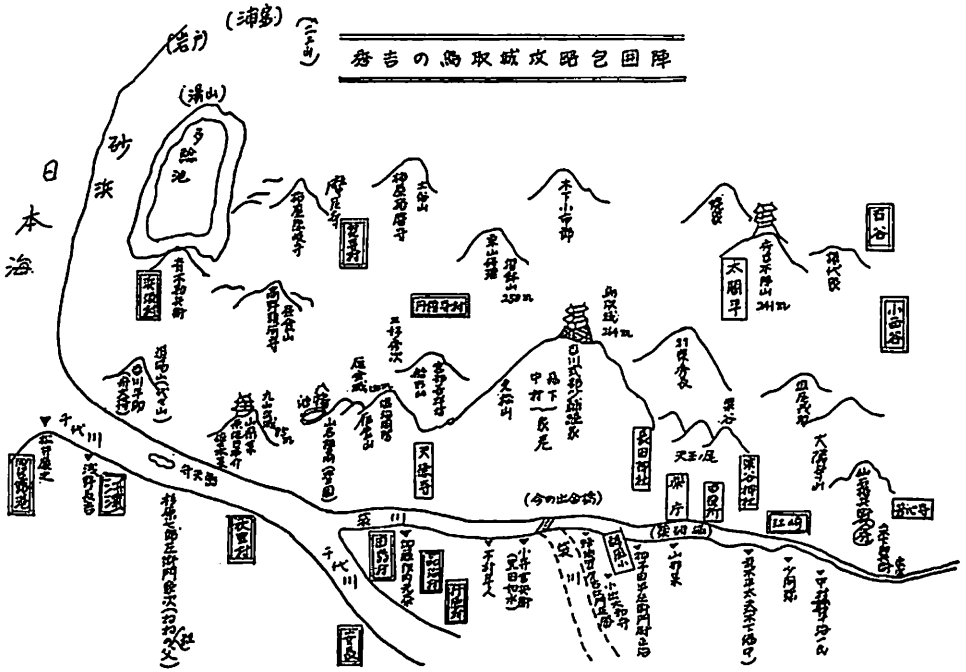
右近は帝釈山を降りると、瓢箪池から栗谷川に沿う久松山東方の秀長陣屋を皮切りに、天王ノ尾に布陣の堀尾茂助（吉晴）、大隣寺山の仏石権兵衛（久秀）、そして湊川沿いの土手に作られた陣屋には、城の正面を睨んで中村孫平次（一氏）、荒木平太夫（木下備中守）、小出大和守（吉政）神子田半左衛門（正治）、蜂須賀小六（正勝）、黒田官兵衛（孝高）、品治村に木下隼人介（重高）、田島に加藤作内（光泰）と続く。

右近はこの陣屋の守将に慰労の言葉をかけて戦況聴取の筆をとった。筆録しながら右近は、各隊の将がほとんど三十代の精鋭ぞろいであることに、秀吉軍団の恐るべき未来の力を感じた。

その隊長が語る戦況は、殺風景な県境越えの殺戮と戦功、そして城を囲んで二か月も戦いのない日々に髀肉の嘆をかこつ話ばかり。その間にも退屈した兵が他隊の兵と小競りいしたり、撲り合いを始めたりの場面を右近は苦笑して見た。

この一連の戦況聴取の中で、摩尼寺の道好和尚が毛利方に通じているということで帝釈山に招（よ）んで、戦病死者の供養を始めた最中に摩尼寺を焼き討ちした事件とか、秀吉軍に徹底抗戦する湖山池西岸の防己尾城主吉岡将監が、攻め手の田賀文蔵から旗指物の千成瓢箪を奪い取ったが、やがて亀井新十郎の応援で将監は遁走したなどの戦況も聞いた。

が右近の胸を打ったのは、雁金砦の裏がわ



八幡池畔に布陣の山名禅高との出会いである。秀吉軍団の中でただ一人毛色の違った禅高は、去年まで鳥取城主だった山名豊国。

右近は初対面だったが、豊国のことは連歌の名手として都でも知られ、幽斉や明智光秀から聞いていた。大兵の偉丈夫に似合わぬ物静かな態度とその語調は、どこか幽斉や光秀と似かよった文化の香りがする、と右近は感じた。生れたときから守護館で育った気品と教養が、血となり肉となっているせいだろうか。

そのとき禅高は、右近とちょっと話を交わしただけで、心の窓を開く思いで語りだした。

「自分は羽柴殿の鳥取攻略の戦列に加えられたとき、ひょっとすると鳥取城主に復帰できるのではないかと思ったが、愚かなことでした。本陣の主流から離れた所に長くいると、つくづく諸行無常、盛者必衰の思いにかられます。」

「自分が尼子、毛利、羽柴殿と、ほとんど戦わずして、時の侵入者に追従したのは、因幡の国びとを殺したくなかったからです」

禅高はその時どきの動きをかいつまんで語った。

「自分には、征服者のごとく嗜虐的な人殺しはできないが、戦国の世は人を狂わせます。自分もただ一度、武田高信殿を騙して、有無を言わさず斬殺したことが悔となり…」

そこまで語って禅高は瞼を閉じた。右近はうなずいて

「それで仏門に…」

「そうです。武田殿の供養の気持ちをこめて、仏の道に入ったともいえます。…それにしても高山殿は、なぜキリシタンの道を選ばれたのですか」

「わたしは元服の前、父と共に洗礼を受けているので、キリシタンが身についてしまった。でも、信仰と戦争を両立させることは、むつかしい問題です。信長さまの仏教弾圧の経過から推して、わしを軍監に差し向けることが、キリシタンの普及と仏教衰亡に役立つと考えられたからでしょう。…それにしても、わしは鳥取へ出発する四か月前の復活祭が、きのうのように浮かんできます」

右近はここでひと息入れて茶をすすり、次のような復活祭の顛末を語った。

その話というのは、今年の春、全東洋イエズス会総長代理の巡察使ヴァリニャーノ神父が高槻に来た。春分がすんでイースターの話が出たので、高槻の教会で復活祭の儀式を挙げることになった。そのとき日本で初めて輸入したパイプオルガンを使って、聖歌隊が歌う清く美しいグレゴリヨ聖歌は、高槻に集まった一万五千の信徒の胸を打った。そのとき安土のセミナリヨからもたくさんの生徒が来て参加した。信長が推奨したからだが、その後、ヴァリニャーノ神父を連れて右近が安土に行ったとき、信長は秘蔵の狩野永徳の逸品〝安土屏風〟を神父に与えた。それほど気に入ったのである。話を聞いた禅高は

「ほう、そんなに信長殿はキリシタンに…」

と感嘆して溜息をついた。

「そのヴァリニャーノ神父さんは、九州の大友、有馬、大村各大名家の子弟を、少年使節として一緒にローマ法王庁に、連れて行く話を進めているそうです。」

右近の話は終った。

禅高にとって右近の話は、戦乱の世に珍らしく次元の違う世界の話だった。このようなキリシタンの話を聞くと、戦いの続く日本国内の覇権争いなど何と微細な、そして仏門の世界さえも余りに微塵世界のことのように思われた。キリシタンの世界は、まさに西半球と東半球に跨がる地球規模の、宗教と民族にかかわる話題ではないか。

禅高は未知の世界の蒙を啓かれた感じに心から唸った。

さて右近は、戦況査察を終って高槻に帰ると、翌日は安土に伺候して信長に報告した。『信長公記』の「とっとりより罷り帰り、彼表堅固の様子、絵図を以て貝に言上…」というわけである。

このときの報告が『信長公記』の十月二十日条の

「…（前略）…餓鬼のごとく痩衰へたる男女、柵際へ寄、喉焦、引出し扶け候へとさけび、叫喚の悲しみ、哀れなる有様、目も当てられず。鉄砲を以て打倒し候へば、片息したる其者を、人集まり、刃物を手々に持て続節を離ち、実取候キ。身の内にても、取分け頭能きあぢはひありと相見へて、頸をこなたかなたへ奪取り、逃げ候キ。（以下略）」（原典のまま）

このような飢餓地獄さながらの状況に、経家は、秀吉からの降伏勧告の親書を持参した堀尾茂助の言を入れて降伏した。

秀吉の条件は、「森下・中村・塩冶・奈佐・山県ら五人を切腹。経家以下芸州から来た者は送り帰す」というものだったが、経家は城

兵の助命と引き替えに自刃すると主張、十月二十五日久松山麓の真教寺で切腹した。

そのとき経家は、毛利一門のため名を残すことができて武門の誉れであると、父子宛の遺書をしたためて秀吉に託した。「美事な経家殿の最期であるが、六百石の城番という臨時の守将には前代未聞の珍事である」と秀吉の側衆は語った。

こうして落城した鳥取城には宮部善祥坊継潤が城主に居据わり、秀吉の大軍団は姫路へ引揚げた。

その殿隊の先頭に、馬上の禅高は経家の最期に厳粛な思いを馳せながら…元春殿の援軍が来なくてよかった、因幡の国人が数多殺されずにすんだから…禅高は何度もうなずきながら、木枯らしの蒲生峠を但馬路へ引揚げて行った。

（完）

【天神山城跡】
右の小川が湖山川（古川）で前方の橋の辺から湖山池（周囲十六キロ）。古川の川幅は広く左のグラウンドは兵糧の荷揚場だった。城山の右が搦手の道。左端が城の正面で山頂に山層天守閣があったという。（50頁参照）城山の南方続きが卯山である。（46頁地図参照）

尼子氏略系図

道誉（京極）―高秀（尼子）―高久―持久―清定―経久―政久―晴久―義久
　　経久―倫久
　　経久―秀久
　　経久―勝久
　　経久―国久―興久
　　国久―豊久
　　国久―敬久

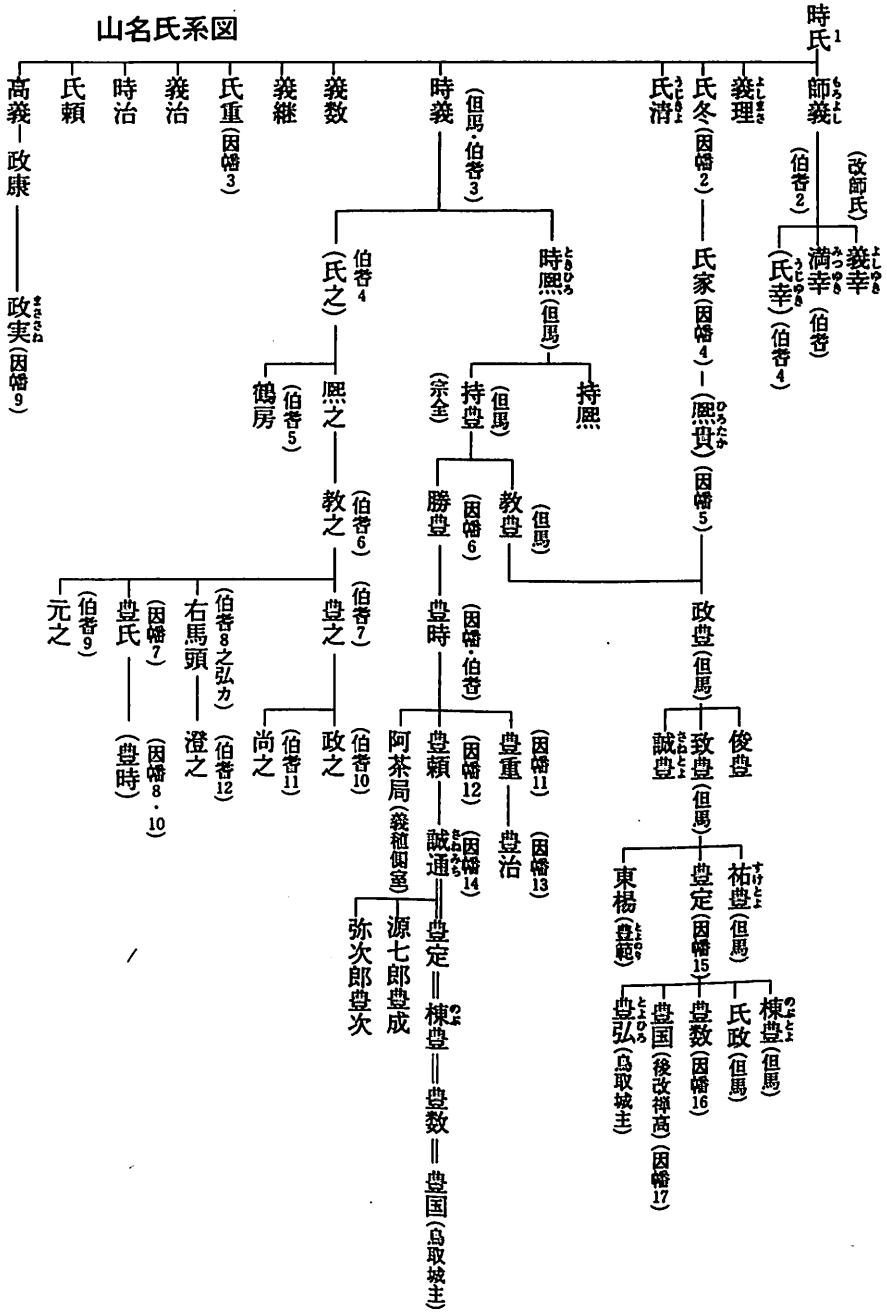
足利氏略系図

源義家―義国―義重（新田）
　　義国―義康（足利）―義兼―義氏―泰氏―頼氏―家時
　　義氏―貞氏
　　貞氏―尊氏 1
　　尊氏―直義―直冬（尊氏の実子）
　　尊氏―義詮 2 ―義満 3
　　義満―義持 4 ―義量 5
　　義満―義教 6 ―義勝 7
　　義教―義政 8 ―義尚 9
　　義教―義視 10 ―義植
　　義教―政知（堀越公方）
　　政知―茶々丸
　　政知―義澄 11
　　義澄―義晴 12
　　義晴―義輝 13
　　義晴―義昭 15
　　義澄―義維
　　義維―義栄 14
　　尊氏―基氏（一）―氏満（二）
　　氏満―満兼（三）―持氏（四）
　　持氏―成氏（古河公方）―政氏
　　政氏―高基―晴氏―義氏―国朝―頼氏（宮連川）
　　高基―義明（小弓御所）
　　高基―基頼
　　持氏―満直（稲村御所）
　　持氏―満貞（篠川御所）
　　持氏―安王丸
　　持氏―春王丸

毛利氏略系図

元就―隆元―輝元
　　隆元―元春（吉川）
　　隆元―隆景（小早川）
　　輝元―秀就（徳山毛利氏）―就隆
　　秀就―綱広―吉就―吉広―吉元
　　輝元―秀元（長府毛利氏）
　　秀元―光広
　　秀元―元清（清末毛利氏）―元知
　　元就―元清

山名氏系図

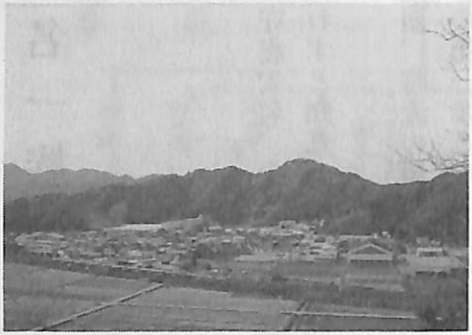


（注）山名氏系図は数種あるが、ここでは兵庫県美方郡村岡町村岡の池田四朗氏所蔵にかかる山名系図を基本とし、若干の史料的補正を加えた。なお池田氏所蔵山名系図は江戸初期に「稲嶋民談記」に収録されている。

二上山城跡

北東からみた二上山

道竹城跡

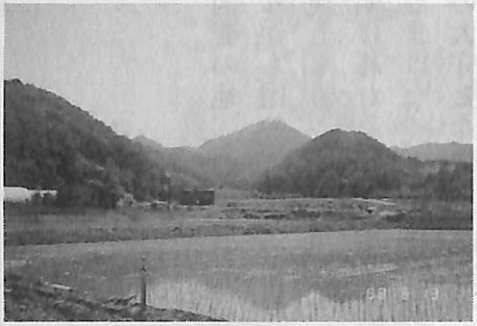


東方から見た道竹城跡

鳥取城跡

東方山上の丸のうち二ノ丸から見た
山上本丸・天守台は右方

鵯尾（ひよどりお）城跡



玉津　殿屋敷跡から遠望（中央）

伯耆山名一族の城館遺跡

吉田浅雄

はじめに

室町時代の守護大名、山名氏の基盤を確立したのは、いわずと知れ、山名小二郎時氏である。

南北朝戦乱期、時流の洞察敏なる巧者彼時氏に、栄達への第一歩となったのが、伯耆の国守護補任の大命であった。時に建武四年（一三三七）春と云う。

家祖義範が関東の地に家名を興してから百五十余年、八代目にして天下に角頭を顕した時氏であった。彼が任地にどのような施策をこころみたのか、また移り変った守護領国制の元統治をどう考えたのか、ともあれ、代々伯耆の豪族だった名和氏に対し、〝他所者〟の山名氏が大きく伯耆入りしたのだった。

任地の国状を察知した時氏は、統治の拠点をかって国衙の地、久米郡内とした。土地豊沃広大、しかも国の東部への選地は、京への地理的利便とも云ってよい。

しかし明け暮れる戦乱の中、治国論理など展開するひまはなく、更に彼優位な栄達はついに五州の大守となって、幕政への参画、京への常任、幸い子女に恵まれた時氏は、嫡男師義以下への代任による分割統治をよしとした。

とりわけ伯耆は、守護府からかけ離れてあった西部統治に、その一族を分割的派遣で支配、因幡ではみられない特色となった。その山名氏中世二百五十年間の興衰の中で、かつて覇権を駆使した守護城と一族の諸城砦とは、その問いに応えたいとしたのが本題である。

伯耆山名氏系図（時系図参考に作成）

75 伯耆山名一族の城館遺跡

一　伯耆鎮府の打吹城

伯耆山名二代師義によって創築されてから天正八年（一五八〇）氏豊まで、およそ二百十年間、いわば伯耆の守護城であった。

しかしその後の当城には伯耆の国人南條氏、近世に入って中村氏、更には藩政期の池田二家の入部、もちろんこの間、尼子、毛利の侵攻に伴って城地の変遷は大きい。

現今に伝える城跡名称の中には、極めて短期であったが、南條時代の余影が濃厚に伝わる。この中で当城の山名時代の城造りとは一体どうあったのか、城の表裏、系態、及び規模拡大の中で模索し描想してみたい。

一、師義の築城は低山地から高嶺への移城つまり防備性豊かな山岳城砦の要求とみる。

二、それを充足したのが打吹山であり、かつ南北朝期待有の山上主義的築城であった。これは現存遺構の山上平地とその東峰二段郭を基本とした構成を可としたもの。

三、田内からの移城当時を含めて室町戦国初期の城下の形成過程では、当城山東麓がまず発展したと云う。つまり初頭の城表は東で山上三連郭の縄張りに合致と云えよう。

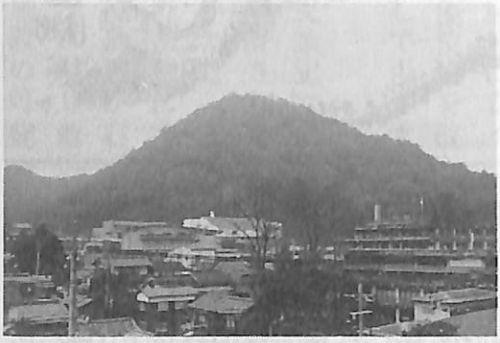
四、もっとも二百年間の対敵情勢の変化に即応する縄張りはあってよい。特に後期、西方からの脅威に対処した広範な連郭構築は、広大な城域を包含するに至った。

以上を置いて更に付記するは、各年代の城主居館跡に触れたい。前掲三の東麓発展を説いたが、その中に字「殿屋敷」の地名を残す。現在の倉吉市役所付近である。中世の城主居屋敷を伝える地名として鳥取県内にその事例多とし、織豊時代の「御屋敷」と一線を画して存在、つまり打吹山麓の殿屋敷は山名、尼子及び毛利支配時代の館跡を示唆とみたい。なぜならば近世荒尾氏の陣屋は市役所の西隣、成徳小学校の地、ここを中村氏も居館地とし、南條氏支配では陣屋跡の上方鎮霊神社の境内に「備前屋敷」の名を残す。

もっとも山上平地は、東西七四m、南北四

六m広さ二千八百平方m、臨戦態勢の元では十分居住できたであろう。また大永の尼子侵攻等による外圧支配の中でも、当然山名氏の潜在的存在はあったとみえ、守護館の中に隠世の日々があったと思いたい。

ともあれ、この城は近世城郭時代の変革と城主、城代の封除を経て廃城、更に元和の破却を受けた。さいわい、その後鳥取藩の荒尾氏は城跡地を〝おとめ山〟として管理し、遺跡と樹木の保護に努めた。おかげで美しい山容のもつ樹林は、鳥取久松山より良いと自賛する地元の人たち、その根元は、鳥取城よりはるかに古い山名氏の遺産といえるかもしれない。



打吹城跡　北方倉吉市街から見た城山
中央建物は市立博物館
右に倉吉市役所

打吹城跡　山上の本丸跡

伯耆鎮府
打吹城跡 山名時代初期城郭圖（縮）

主郭部各遺構面積（概略）

1	本丸	870坪
2	二ノ段	330〃
3	三ノ段	210〃
4	小鶴丸	165〃
5	西ノ腰部	360〃
6	編前丸	330〃

伯耆國守護所倉吉付近圖

二　時氏創築の〝第一歩〟田内城砦

建武四年（一三三七・延元二）山名時氏がはじめて守護を拝命したのが伯耆の国、その久米郡内灘ノ郷田内村の小山に城を築き、城下に料館を構え、治国統制への号令を下した。

だがいかにせん、一国管掌の拠城としては城地狭小だったというのか、三十余年後打吹移城となる。

本城跡を踏査したのは昭和五十七年十月、更に本稿を書くに当って再度この城地に立って感受する要害性と地理的立地の優位性を改めて認識、守護府設定の背景に決して否とする要因の見出しはなかった。

当時の城下構成のことが『伯耆民談記』に読めるが、最近の地域開発で発掘調査されたこの城地西方の山ふところでみつかった「上養水遺跡」では、南北朝期から室町前期に符合する十四、五世紀とみられる陶磁器類が石列、石敷と共に出土、その検出状況に対し地元教委は、守護所か、または関連施設の可能性を考察している。

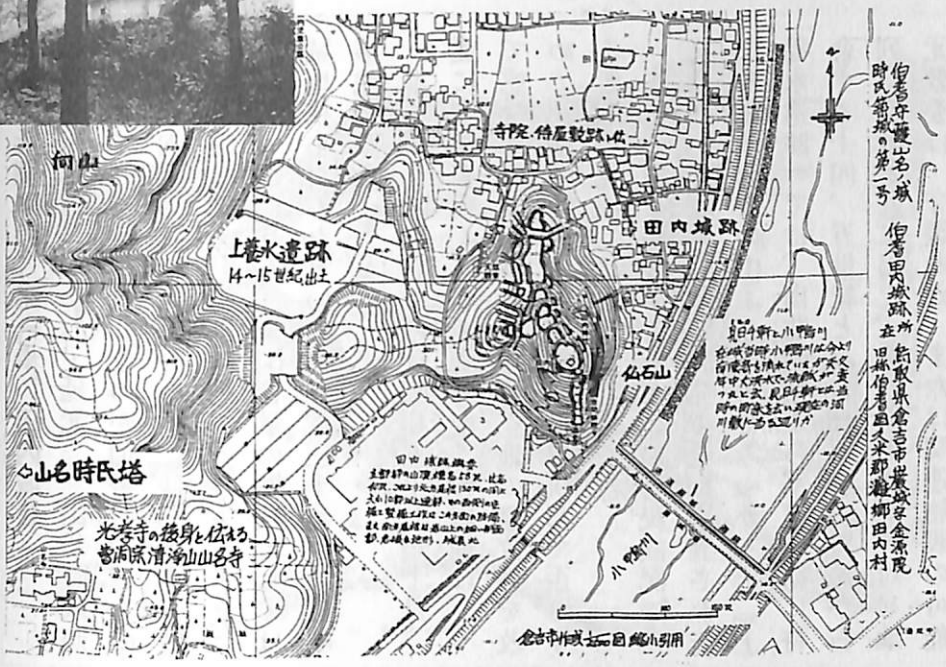
かつて時氏が山名家の菩提所として創建を伝える光孝寺は、はたしていずれだったのか、その後身と云う山名寺は、いま上養水遺跡のすぐ西丘陵山地の麓に所在、また移動を風聞する時氏塔はこの寺山に眠る。城山の田内神社は城の守護神か「祈願所」と碑にみえる。山名氏研究の上で重要な視点を提起する田内城跡周辺であることを付記した。

いま城山山頂は、四百平方m余の平地、そこに二層の模擬櫓が建つ、地元田内の人たちの奉仕の顕彰であろう。その軒瓦に丸に二引の山名氏紋所の刻印はうれしい。

三　倉吉に遺存　山名氏館跡

いま倉吉市街のど真中に曹洞宗大岳院が所在する。およそ七十m四方の境内がかつて打吹城主山名氏豊の居館があった所と伝える。

氏豊は天正八年（一五八〇）西国毛利氏の山陰進攻で城を捨て因幡へ敗走中、青谷の奥で土



豪に討れ、伯耆山名の嫡統はその跡を断った。

平成四年、大岳院境内の発掘調査によると、（倉吉市教委、当報告書）下層遺構では「十五世紀の富裕層の屋敷跡で…」とし、「山名氏館跡の蓋然性が高く」とする。

つまりこの所は、氏豊の居館のみならず長く伯耆山名の守護館が営築されていた所と考える妥当性が指摘されてよいだろう。

地理的環境は付図に譲るが、かつてご住職に会した談話と、かつ近世文献に描写する地成りは、現地の地形から十分納得するに足るものだった。

四　東伯耆の防衛拠点　泊の河口（かわぐち）城

この城は、国道九号と平行する山陰線泊駅の裏山に在った。／かつて因幡境に位置し、かつ海沿をも扼する海陸交通の要地に立脚、また城山は標高六五ｍの小山であるが、入念な城造りの余影は歴史と共に地元泊村の指定する文化財となっている。

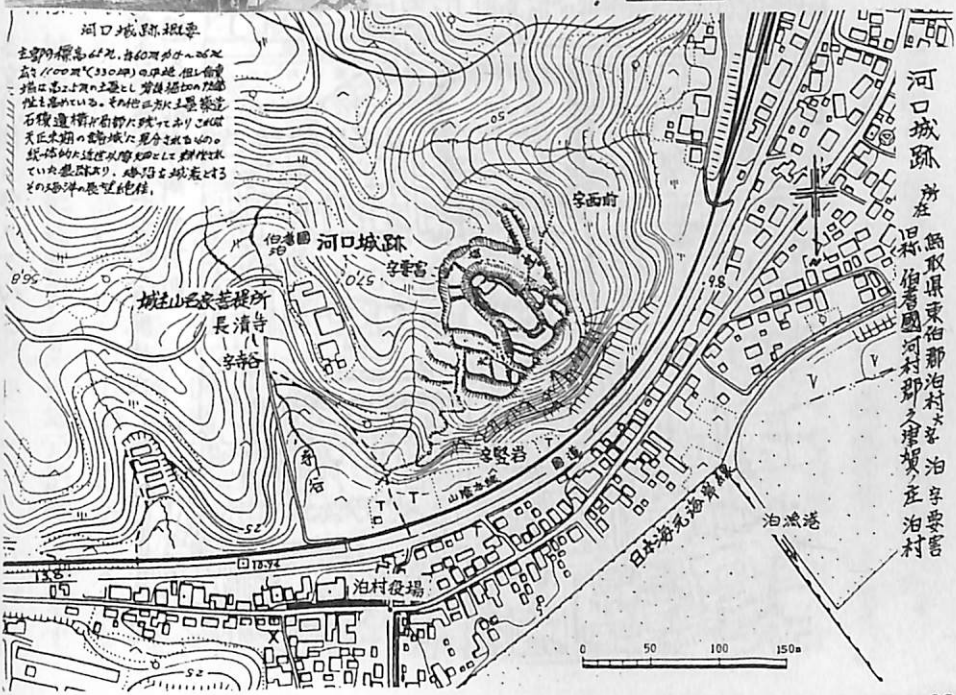
山名氏館跡

所在　鳥取県倉吉市東町四三番地大岳院境内
旧称　伯耆国久米郡灘ノ郷倉吉町

城主は、伯耆山名氏の一族で「山名刑部大輔久氏」し云うが家系不詳、城はこの代々の家城で、東方防衛の役割を担っていたであろう。

しかし十六世紀、出雲尼子氏に蹂躙され城を退去した刑部は、天文九年（一五四〇）南條支援を受けて奪還し帰城、改苗し川口刑部と云った。天正の戦乱を経て近世南條氏の滅亡と共に城の歴史を閉じた。いわば伯耆山名の庶流といえども慶長年代まで残ったのか。

近世泊番所が設置、国境警備と海上監視がなされた所、やはり主要拠点だったのか。



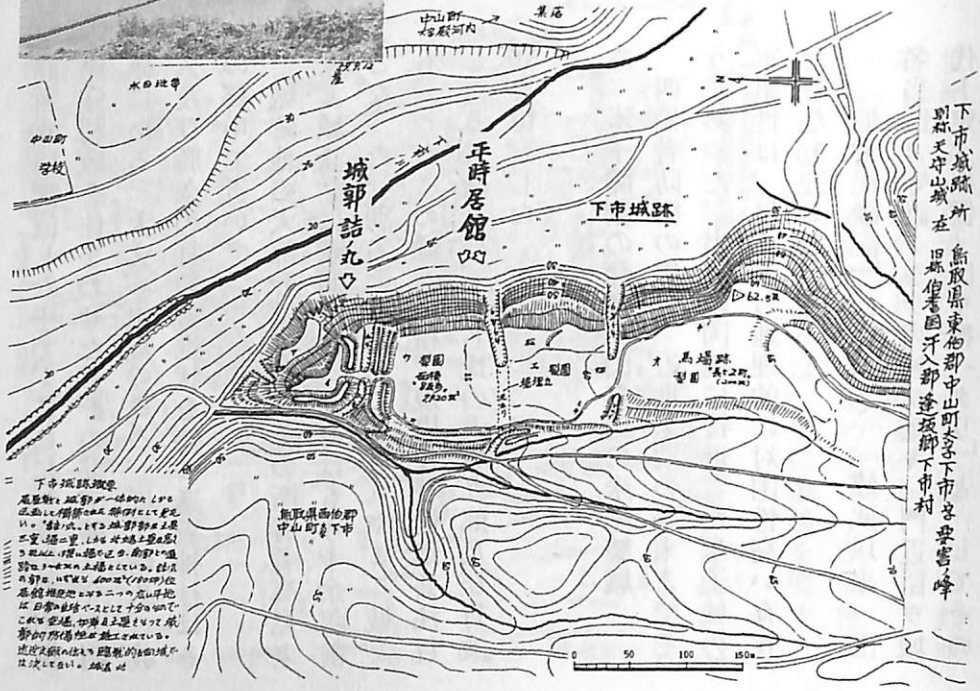
五　大坂九郎と下市ノ城

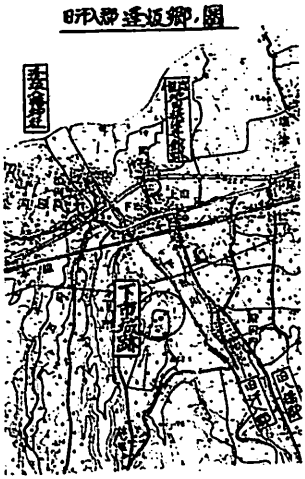
伯耆山名氏を論考するとき、近世著書『稲場氏談記』の山名氏系図を引用する学究が多い。なぜならば、一族庶流の伯耆分駐の事が誌されてあるからだ。

この中に師義の末子として「大坂九郎」がありその子に丹波守を載す。この裏付け資料は指摘なし得ないが、大坂は逢坂に共通し異論はない。逢坂は伯耆汗入郡の逢坂郷、ところで、九郎と下市城の結び付けは、筆者の独想で何の立証もない言い出しごとである。

室町前期この時代、山名九郎が守護所と西伯耆の中間要地に守護領国の分権的支配の一端を担って分駐したことは肯定を可とするが、その地に居在した遺跡はとなると、何の伝えもない。

かと云って綿密な調査をしたわけでもないが、そこに格





好の中世城郭の存在が本稿を踊らせた次第、この城は居館と城の一体性の構成であると同時に、日常生活と緊急防衛の用途区分が明確にされた特異な縄張り城とみたことで、山名氏と時代背景に合致するからだ。

この地方の戦国軍記ではこの城を戦国末期天正のころ吉川氏の部将森脇若狭の拠った城とするが、戦略的臨戦の城でなく恒久的築城で、森脇氏は伯耆侵攻の足場とし古城を活用したに過ぎないだろう。

この地は別項八橋と同様、伯耆の中間要地、近世に至って入国の池田光政は、伯耆鎮定に諸所重臣配置した中で、ここに一族の池田播津守利政を住まわせた。その邸宅跡は今も明確にある。天文、永禄のころ、尼子晴久、義久及び勝久の社領寄進状を持つ逢坂神社はその郷中で近い。

城跡地の大部分は梨園、その所有者高見老人と城談話に時間を持ったのはもう十余年前となった。別名天守山（てんもりやま）城とも云ったこの城、面積、規模及び構造共注目し得る城造りに、山名氏の大坂九郎及び丹波守を憶察した。

六　米子開創の発端　山名氏の米子築城

西伯耆防衛の拠点、近世末期の幕末までそうであった。出雲の国境に接近した米子城の軍事性は、早くから地理的に対国性高い存在だったと云える。

『伯耆民談記』にいわく、「建武以来、山名当国ノ守護トシテ当城ヲ築キ一門近臣ヲ城代ト定メ出雲ノ国ヲ押ヘタリ」と、してその

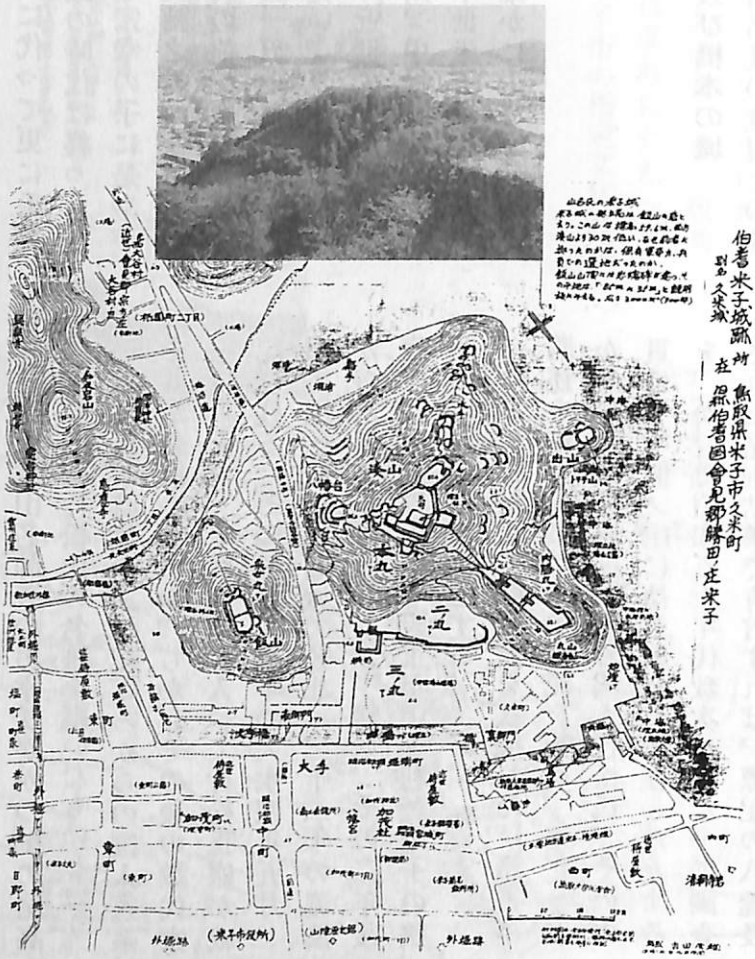
城は、「ソノコロ飯ノ山ヲ本城トシテ、湊山ヘハ外廓ノ如ク構エ」とする。

伯耆山名氏の一族、山名六郎宗幸が飯山に砦を築いたのが米子城のはじまりと云う。時は十五世紀末、天下争乱への応仁の乱勃発、出雲の守護代尼子氏の執拗な他国侵攻に対峙するためだった。

山名宗幸は義幸の曽孫に当る。義幸は山名氏の嫡流師義の嫡男、しかし病弱故と称し野に下り領国日野郡内に隠世、子孫は西伯耆の中で確固とし、主家の守護代的管国経営の一翼を担っていたとみる。

米子城が隣国尼子経久に攻略されたのは、十六世紀に入った大永四年（一五二四）のいわゆる〝伯耆の五月崩れ〟の時という。

しばらく続いた尼子支配の中で、山名庶流の諸家がどうあったかは、更に筆論を要する



だろう。ともあれ、尼子氏に代って更に毛利氏の外敵侵攻に伯耆山名氏の時代は終った。

米子城でみる山名氏は、宗幸の子に是幸が見え、その後「山名治部大輔之秀」なる者がおり、尼子配下の元で毛利の前に自刄し果てたと云う。時に元亀元年（一五七〇）山名氏最後の城主であったとみたい。

今日米子城跡に立って、近世のはなやかな城郭時代に造建された吉川、中村時代の天守を夢みる市民はいるが、中世米子城の鼻祖、山名時代を想起する者は確かに少ない。遠い昔のことである。

七　行松氏の家城

尾高、八橋及び橋本の城

行松（ゆきまつ）も大坂九郎と同様山名氏の庶流との前提で本稿を成立させたい。

八橋（やばせ）は中伯耆、尾高と橋本城は西伯耆に当る。地域距たる前二城に行松氏が係わるのは、戦国期に入ってからではなかろうか。

行松氏は山名師義の男幸松がかつての尾高地方の旧豪行松氏の名跡を継いだものという。いわば鎌倉時代十三世紀ごろからの国人家系それを乗取ったのか、しかしその後の数代家系はみえず、十六世紀に入って行松正盛が戦記に残る。その一五二四年の大永四年五月、出雲尼子氏に尾高城で敗北、三十八年の流浪から永禄五年（一五六二）帰城、その二年後病死、数人の子息も天正年中毛利と尼子の狭間にほん弄され滅亡する。

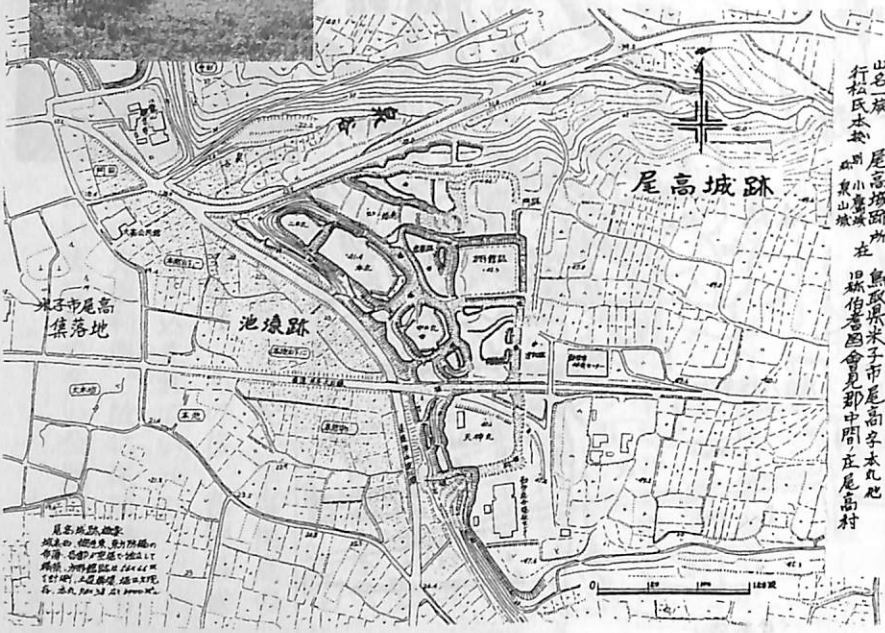
ここに行松氏の略系図を私撰した。諸書の論述を借用して、家系混沌を知る。もっとも、かつて〝伯耆衆〟とみる国人行松氏、その本貫地を中間ノ庄に持ち尾高に居在したとするを、かつて昭和五十年代数次にわたって調査された発掘結果で肯首すれば、標記の八橋及び橋本の城、そこに伝える行松氏は庶流とみたい。しかも「代々・家城」とする表現も極めてあいまいと云えよう。

また、戦国期の行松氏の〝立役者〟正盛に

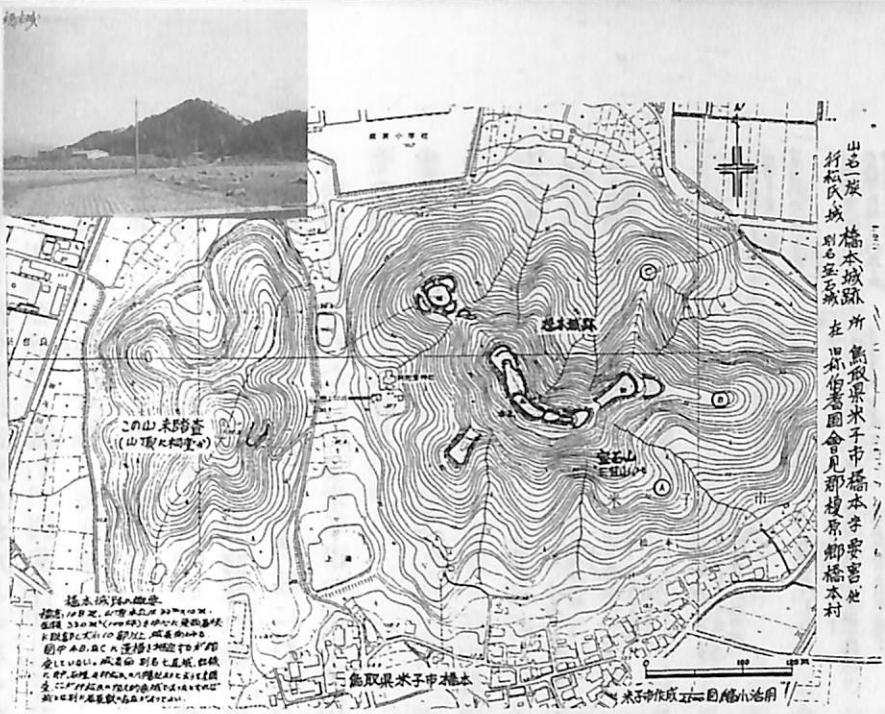
二児があり後杉原氏に養われたとするくだり異説がみえるがかく識す。伯耆香原山で吉川軍に敗走した次郎四郎、天正十三年七月、これを最後に行松氏は史上から消えた。

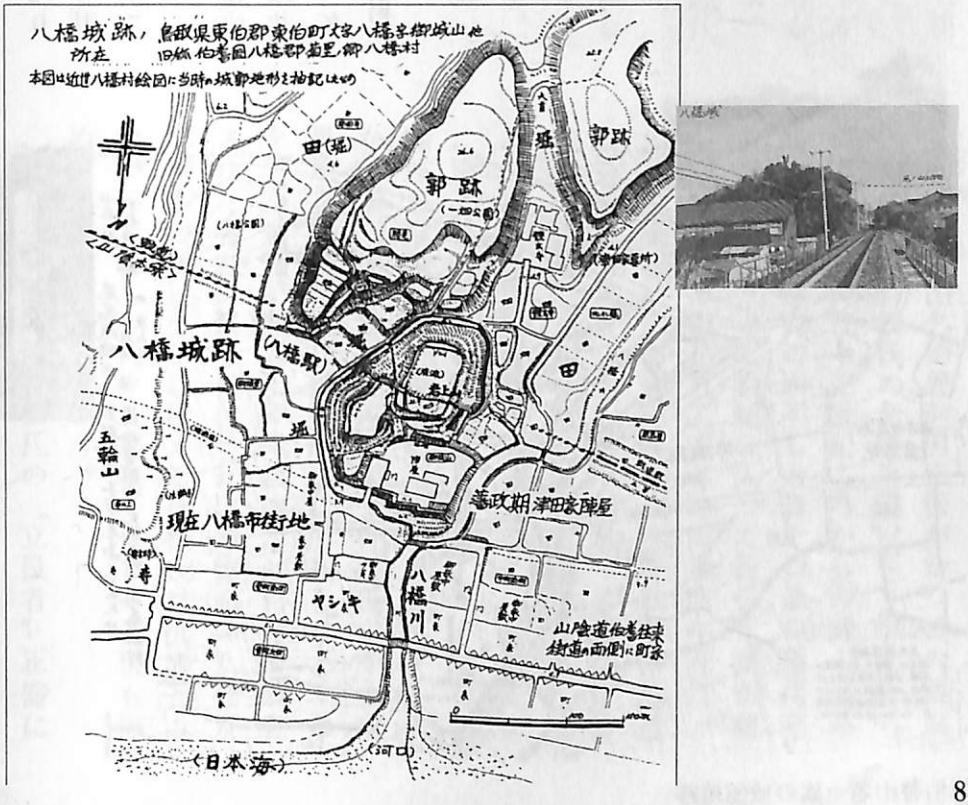
尾高、八橋両城共に城主交替の歴史は続いたが省略、尾高城はかつて西伯耆の軍、政共に中心的存在、その城跡は多岐にわたって〝秀城〟とされた。いま米子市の指定文化財、その機構は諸書に詳しい。

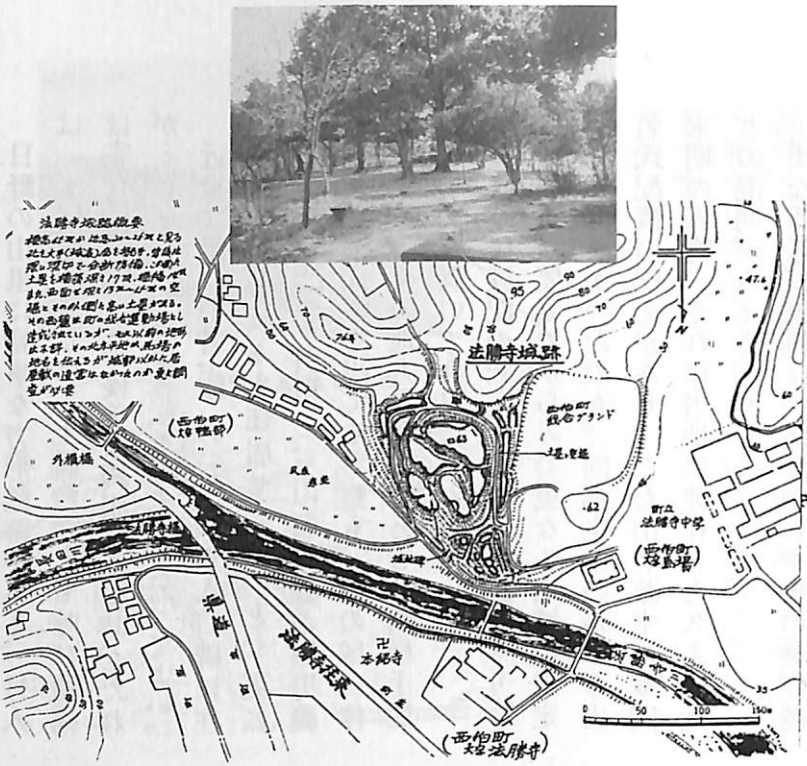
伯耆山名の一族と伝える
行松氏略系図



山名一族
行松氏本拠 尾高城跡所在 鳥取県米子市尾高字本丸地
別 小高城
出 東山城
根伯耆国会見郡中間ノ庄尾高村


橋本城跡
この山 未調査
(山頂に祠堂か)
鳥取県米子市橋本
米子市作成 工一図 橋小池用


八橋城跡
郭跡
田(堀)
八橋駅
五輪山
現在八橋市街地
八橋川
(日本海)



法勝寺城跡（法勝寺城）
所在　鳥取県西伯郡西伯町大字幡郎字安城他
別称　尾崎城
旧称　伯耆国会見郡永田ノ左幡郎村（加茂村ノ上）

八　法勝寺（ほっしょうじ）城

伯耆の西端法勝寺は、出雲に接近しいわば西伯耆の主要拠点に山名氏の一族が分駐したという。

別掲山名系図でいえば、師義の子満幸が「法勝寺知行」としてここに分権的支配を持った。時は十四世紀半ば、更に満幸の兄義幸から三代の遠江守某がやはりここを分領した。

ところがその文明年中、守護家の内紛でこの所法勝寺城に立てこもった山名元之は、甥の政之と相争し敗走したという。これまで尼子と毛利の覇権抗争の場としてその創築と伝えたが、それよりはるかに古い城歴といえる。

ともあれ、満幸から元之までででも百余年間、山名氏のかかわった法勝寺支配、軍事拠点の城と治所統管の法勝寺は、その後、西国梟雄の攻防争奪の中に引き込まれていった。

城は低丘陵地の先端利用、故に尾崎城ともいった。城跡はいま桜樹の多い公園である。

九　俣野の土居城　地方有数の居館城郭

日野の山里に見事な方形館跡がある。村人は「土居畑」または「土居台」とも呼び遺構は完存に近い。この優美な縄張りを何時、だれが…となると、謎多き伝承のままと云ってよい。

近世文献『伯耆志』の云う「土人口碑に往古フヂユキと云ふ人住居せし由」と、更に『伯耆民談記』を引用し、山名師義の嫡男義幸、また弟氏幸を当てる考察も、その域に停まり、その後の地方公刊史誌ともに同様手法のまま文を置いて今日にいたっている。

つまり民談記の云う「日野郡に蟄居せり」は、複雑な要素のからみで更なる地域の限定がなし得なかったのか。同郡生山の地をも山名氏配置の伝えがあり、ただ山名藤幸は戦国末期の人物、それに当地に健在した久志路氏との混同がみえてあやしい。

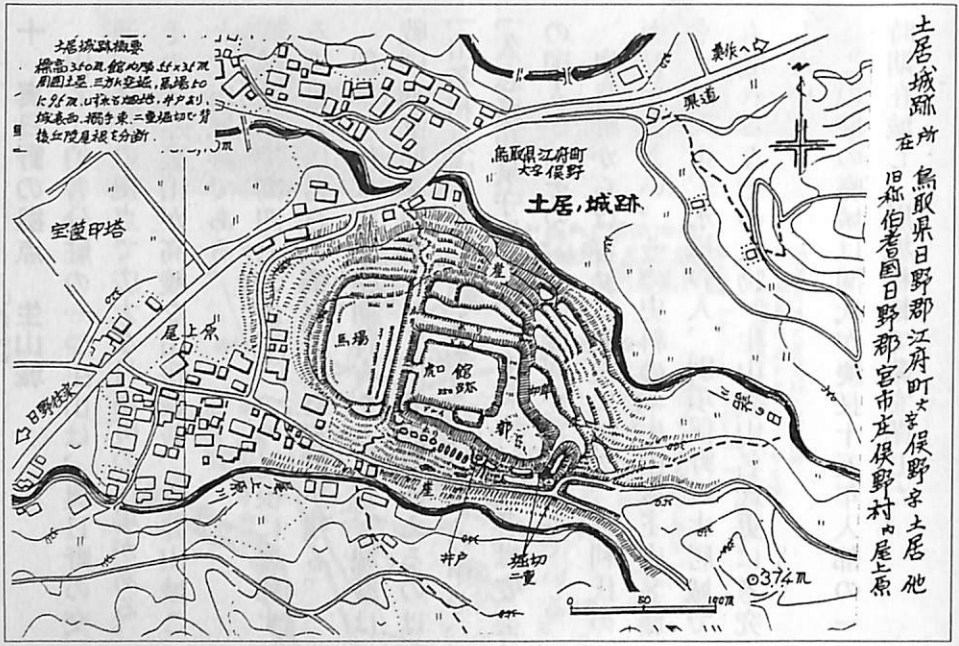
更なる考察資料に、俣野から一里の美作越えの近くに在る「天王畝の五輪」は、「相伝伯州庄山城主陰山藤行者軍敗而走到此自殺」（作陽誌）とするもの、前記山名藤幸と同人かと云うと、陰山氏なる中世土豪が日野中部に実在した事情に照し奇怪となる。

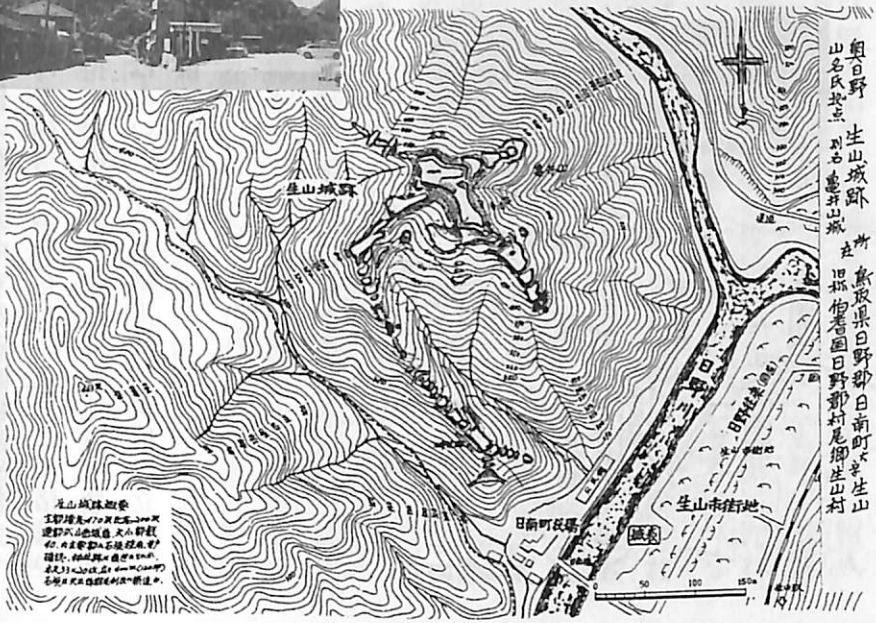
ともあれ筆者は云う。日野山名氏の拠点は少なくとも初期的に本項俣野を是としたい。

ここは、倉吉の守護所から美作蒜山経由だと米子よりはるかに近く、しかも京師への路程等交易の要地、地理的に山間とはいえ、土地高燥閑雅、「病身故」と称し隠遁する貴人には、まさに桃源の境地だったこと、現地に立って直感した。

昭和六十一年十一月、初踏から三度当地に至り遺構を見分、地元教委に所見を寄せたが、更に土居の西麓に拝見した宝篋印塔の数基、欠落甚だしいが、優美な室町前中期の様相を呈している。ここから北方へ山一つを越えた助沢の五輪塔は、正平十五年の在銘する巨塔、正平は南朝年号で時氏の因伯に号令華やかなころ、この地方の開発を示唆するものとみて付記した。

中世の長い歴史の中でみる城砦遺跡を、一時限だけで極言は否としたいが、この格段の品格を持った構築は、決して一地方土豪の造り物ではないと、その納得は、現地に立つことで肯首できるだろう。





十　奥日野の拠点　生山城（しょうやま）

山名氏伯耆分駐の一つ生山は、奥日野の交通、文化の拠点で広大な日南町の役場がある。そのすぐ裏山が高峻な山岳城砦、亀井山城こと生山城跡である。

城跡は標高四七〇m、二つの尾根に連郭する主要郭に岩石を積み上げた石垣が残る。

創築年代は南北朝期特有をみるが、城歴は戦国動乱期を顕著とし、山名氏を伝えるのは「山名和泉守景行」がみえる。だがその中で、「久志路和泉守景行」とも載す。後者は安芸の国人か、その二つの混同が気になっている。

奥日野からは容易に備後に越え、毛利氏の影響が大きい。その史料の「生山城主山名藤幸」は天正、永禄の人、別項俣野の土居城でも触れるなぞの人物、生山の山名氏更に考究したい。

この城の廃城は関氏が慶長十五年入部の一時期在城し、黒坂移転で幕を閉じた。

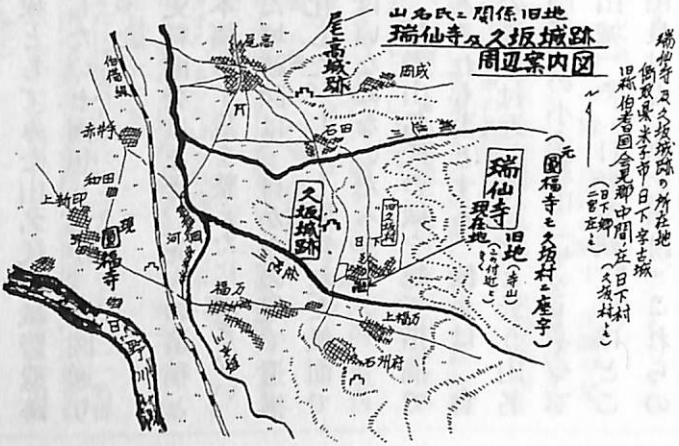
十一　久坂（くさか）城と瑞仙寺

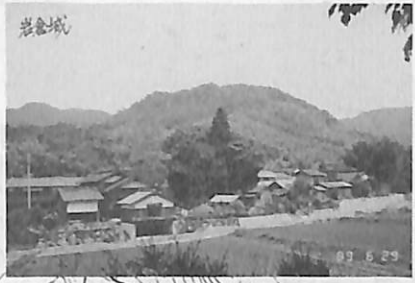
中世文書、わけても山名氏発給の二十二通を所蔵するここ米子市日下の曹洞宗久坂山瑞仙寺は、永享年中時の守護山名教之が衰微する名刹を欲んで再興したと伝える。旧地は山名文書にいう圓福寺と共に東方の寺山にあったときく。

その教之の平温な時世、応仁の乱勃発、十年間の抗争の最中教之が死去、嫡男の豊之はその二年前に他界していた守護家では、内紛、嫡統の政之が但馬守護政豊の支援を受け、叔父の元之と国元で争った。文明十二、三年のこととされ、伯耆戦国の発端といえよう。

久坂城はその舞台の一つ、いずれ彼我山名氏の拠った城してみたい。

西伯耆の主要拠点、尾高城と瑞仙寺の中間に位置した平城でその跡は水田と化したが、村人は歴史を欲んで十五坪の草地と「古城」の地名を残したと話す。





伯耆中世時代小鴨氏系城　岩倉城跡　所在　鳥取県倉吉市岩倉字明谷山地　旧伯耆国会津郡小鴨庄岩倉村

おわりに

中世二百五十年余、西日本に跋扈した大豪族、その山名氏の一族が伯耆の地に扶植した。覇権、その現象としてみた山名氏の城砦遺跡を諸彦に紹介したいと画想したが、意図通りにはいかなかった。

特に独自の史料開発はなく、先人の遺稿と文献を頼りに本稿の丁裁を整えたに過ぎない。ただ誌上にした城跡図は、自からの足で遺構を読み取り図化した。しかし限られた紙面で総花的の反省はいなめないだろう。

かと云って、伯耆山名氏の城を総て指摘できたかと云うとそれも否とする。例えは、倉吉に近い三朝の湯谷付近に拠ったと云う山名元之旧跡、田内北方の小土産山（ザットヤマ）、西伯耆の「円山城」や「日野本城」とはどこか、中伯耆の由良付近の山名事跡、これらの資料は筆者の手元にはない。

鳥取県内の中世城郭をみる資料『因伯古城跡図志』（文政元年成立）は、因幡百六十六

城に対し伯耆では四十五城をみるに過ぎない。しかもこの中には、倉吉打吹、八橋、及び米子の三城は採録されていない。理由は、当時近世鳥取藩にあって古城ではなく「当城」扱いだったからだ。筆者は、実態をとらえる作図の資料とはしなかった。

また、本稿で指摘した城砦の中には、近世城郭時代を経由し更には「破却」という人為的破壊等、いわば山名時代の余韻を残す遺構となれば極めて少ないと云えよう。

ともあれ、伯耆山名氏の初期的領図支配の分駐処策の是非をみるとき、この中にその後入国、封除の近世大名たちが、自からの鎮府と定め、また重臣配置の城邑地が多い。つまり、そこに山名氏の管領拠点の選地と適否を知る。ひいては、時評に俊敏だった開祖時氏のもつ任国統治と領国経営に当った非凡の才智をほめ、すぐれた宰相と云って本稿を閉じたい。

完

紹介

宿坊　東林院

めまぐるしい世の流れの中に静かなたたずまいを見せる禅刹妙心寺、その一画に現代人の心をやすらかに、なごめてくれる宿坊東林院があります。

享禄四年（一五三一）細川高国の嗣子、氏綱が父、高国公の菩提を弔うために建立、のち山名豊国が母方の父高国のゆかりで中興開基となり、直指和尚を開山として以来山名家の菩提寺です。

書院造りの新しい客室、全室庭園に面し、さわやかな木の浴槽、朱膳による精進料理など、京の思い出を一層深めることでしょう。

■宿泊料金　一泊二食つき五、七〇〇円　朝食つき四、七〇〇円（現在）
（消費税は別途、サービス料はいただきません）

■施　設　和室（六畳、八畳）計一〇室　冷暖房完備

■お食事　食事をお申し込みの方には住職手作りの禅風精進料理をご賞味いただいております

■おねがい　洗面具、タオル、ネマキは各自ご持参ください。
夕食をお申し込みの方は午後五時半までに、他の方は午後七時までにお越しください

■お申し込み　電話または往復ハガキにてご予約のうえ、ご一名様一、〇〇〇円の予約金を現金書留か郵便振替（口座番号京都一一三一一二五）にてお送りください（予約金は宿泊料金に充当します）

■住所・電話　〒六一六―八〇三五　京都市右京区花園妙心寺山内
TEL　〇七五―四六三―一三三四

■その他　仏前結婚式、昼食特別精進料理、坐禅研修会、合宿などお気軽にご相談ください（駐車場あり）

研究会報告

山名　章

一　二上山城の県・国の史蹟指定推進

会誌「山名」の第三号に栗村先生執筆の「山名時氏公築城の「二上山城登山記」と小生の補記を載せました。南北朝時代に築城された三四六メートルの二上山城址に登り、二上山城の素晴らしい立地と構造に圧倒された私は、下山するとその足で吉田達男町長に訪町挨拶のため、栗村先生、吉田政博先生、研究会顧問の山本茂信先生と共に岩美町役場に向かいました。

町長室では、二上山登山と城址の実地調査を報告し、全国に三万余の古城址のうち、中世守護所として一国の中心となった城は極く少い。然も他と異り開発的破壊がなかったので、山の姿が殆んど築城時のままであり、中世山城としての歴史的価値も山陰抜群と思うので、町指定の史蹟になっている当城址を、町起しのためにも、深い歴史上のご縁がある山名氏顕彰のためにも、二上山城を先ず県指定史蹟に、次いで文化財保護法による国指定史蹟にと格上げをして下さい。当研究会もお手伝いしますからとお願いしました。

吉田町長は、県会議員五期と参議院議員一期、農水産政務次官を経て平成八年岩美町長に就任の豊かなキャリアの方で当方の提案を取上げて下さり、教育長と観光課長が中心となって推進が行われ、県の現地調査、地権者への説明会、同意書取付の諸手続が完了、今年一月に県史蹟申請がなされました。今年四月からの県議会で審議決定されます。残念なことに吉田町長は、昨年五月入院、九月町長を辞任され、今年一月十六日癌のため逝去さ

れました。在任中病院から役場に屡々出向き、二上山城の県指定申請に気配りをして下さった由、改めて感謝を捧げご冥福をお祈りするものです。

次の国の史蹟指定に向けては、前記栗村先生を中心に、登山同行の先生方に協力願い、国（文化庁）の山陰海岸国立公園指定に当っては推進活動の経験者、山本先生のご指導をぜひお願いするつもりです。

二　二上山城趾関連調査について

平成九年九月下旬、会誌への原稿をお願いするため鳥取県を旅行したとき岩美町に寄り、四月に二上山登山の折、山本先生が発見した山麓の毘沙門堂を調査、像高四十六センチの木像白木造の毘沙門天像を確認しました。土地の古老によると、宗全公時代、城主に命ぜられて上洛し鞍馬寺を拝観した仏師の彫った像が祀られていた由。然し現在のものは、鞍馬寺の様式と異なる像で、昭和八年堂再建のとき寄進されたと堂内に墨書されていることを確認。更に守護所の所在地とされる岩常の常智院で秋葉、不動堂、二上峯地蔵（線刻）、山名氏菩提寺の満願寺廃跡の五輪墓群を調査し、十一月始めの旅行のときは浜坂・楞厳寺の末寺長楽寺（山名家寄進領内）に尾崎老師を訪ね、調査と会誌への執筆依頼をしました。

三　武内理三、林屋辰三郎両先生ご逝去

高名な両先生ご逝去は、新聞、テレビで報道され、一族会の各位もご既承のことと思います。両先生は楞厳寺の調査に当たられた方で私は、山本先生のご紹介でご自宅をお訪ねし会誌寄稿をお願いしました。研究会の会誌発行を評価し温かい激励を頂いていましたが、ご病気のためお約束の原稿は頂戴できず残念でした。武内先生は、昨年三月二日、林屋先生は、今年二月十一日のご逝去でした。謹んでご冥福をお祈りするものです。

口絵写真紹介

東林院殿徹菴高公大居士尊像

山名　章

口絵写真は、東林院蔵山名豊国公画の画像で、豊国公の参禅修業の師であり、勅命を奉じ妙心寺に出世した鉄山宗鈍がこれに賛詞を書いたものである。賛は描かれた人物を賞揚するものであるから賛を呈する人が優れた人格と力量を有する人物であると、肖像人物の真の姿を把握できるものである。この度は紙幅の都合もあり、賛の作者についての略述のみにとどめ、賛詞については次号で述べることにする。

鉄山（一五三二～一六一七）は、武田信玄の臣・窪田右近助長次の子、幼にして甲州恵林寺で剃髪得度、十八歳で駿府の臨済寺に移り、今川義元の軍師太原崇孚住職の下で修業。当時今川氏の人質として太原から教育を受けていた後の徳川家康とは浅からざる関係をもった。

太原入寂後は駿河清見寺東谷宗果に師事し永禄元年（一五五八）二十六才で上洛、詩文を天竜寺策彦、祥雲寺南化に学び、禅機向上を妙心寺の亀年、竜安寺の月航に参究。今川義元が亡んだ八年後、武田信玄が駿府に入り煙滅した臨済寺再興が成ると既に師東谷に随侍参究して悟解し印可を付せられていた鉄山は、臨済寺に復し、東谷の妙心寺出世の後を受けて同寺住職となり、三年後の天正三年（一五七三）正親町天皇の勅命により、武田勝頼外護の下で妙心寺に入寺した。

天正十年信玄上洛の遺志を継いだ勝頼は武運拙く信長・家康同盟攻取の軍により天目山の露と化した。戦後甲駿二州を得た家康は、秀吉と共に北条氏を攻めて関八州の大守となった。然し昔日の如く鉄山を崇敬する家康は、文禄元年（一五九二）領内武州の平林寺に駿府より鉄山を招請した。秀吉没し秀頼の代となると豊臣の権勢忽ち地に落ちて徳川氏の隆盛を見るに至る。家康は、自ら上洛の上、征夷大将軍の拝命を望み、屡々平林寺を訪れて外護の意を尽し、その上妙心寺に登り入寺開堂するよう勧めていたが、たまたま大本山妙心寺から鉄山に対し輪住招請状が発せられたので、鉄山は家康を外護大檀越として妙心に入り再住上堂の儀を挙げた。家康は、鉄山を妙心に永住させる方策として山門の造替を寄進、後陽成天皇も費用の一部を下賜された。慶長五年関ヶ原の戦端が開かれようとするに際し、鉄山は再住の期を終え平林寺に帰住したところに家康は、平林寺に鉄山を訪ね「自分はこれ以上ない程の有力者（権勢のある者）となったので貴僧の檀越になって上げよう」と申し出たが、これを唆拒する。多くの僧は、鉄山が流罪で済めばよいがと心配したが、鉄山自身は「家康を育て上げたのは自分だ。家康はそのことを知っている」と平然としていたという。勿論家康は鉄山の罪を問わなかったがこの話は、優れた禅僧の眼力と豪気さを物語るものであろう。鉄山は慶長十一年妙心寺に塔頭大竜院を創建して衆に接する外後陽成天皇は屡々鉄山を召されて禅要の問答をされた。とも角鉄山が道学兼備の大宗匠として妙心一派の重鎮と仰がれ、皇室直営の形をとる妙心寺の勤王的禅苑に坐し、どんな殊遇を以って迎えようとしても幕府の要請に動かなかったのも、武田氏不運の結果が鉄山をこのような義骨の人としたのかも知れない。

未完

執筆者紹介（敬称略）

冷泉為人
大手前女子大学文学部教授
冷泉家第二十五代当主
（財）冷泉家時雨亭文庫常務理事

山根幸恵
（財）尚徳錬武館長
剣道範士　八段
居合道範士　七段

日置粂左ヱ門
県立由良育英高等学校講師
米子市史編さん協議会
中世部会専門委員

西尾孝昌
県立八鹿高等学校教諭
城郭研究家
但馬史研究会理事
出石有子山城・此隅山城の保存を進める会副会長

鷲見貞雄
作家
鳥取民話研究会会長
鳥取文芸協会副会長

吉田浅雄
郷土史研究家
城郭研究家

編集後記

今号は、主に兵庫・鳥取両県在住の歴史研究家、作家の論考で編集しました。

一族会相談役で鳥取県史編さんの専門委員の日置先生は、伯耆山名創建、外護した禅宗寺院と、貴重な所蔵文書を紹介されました。室町時代に官寺十刹の寺格を有した禅刹のこと、招請した住持が一族や麾下の国人に文芸など文化面で強い影響を与えたとのご指摘は新鮮です。

吉田先生は、伯耆山名の城館遺跡を独特な図面と多数の写真を挿入する手法で存分に紹介されました。ご親切なお計らいに感謝申し上げます。

山根先生は、戦国時代末における因幡守護誠道の遺児源七郎の最後を「稲場民談記」を引き、生き生きと描かれました。文中に設けた巧みな小見出しのおかげで、当時の複雑な状況がよく分り改めて源七郎への哀惜を覚えます。

鳥取県出身の歴史作家として、全国誌「歴史と旅」などに盛んに作品を発表している鷲見先生は、史実と小説の中間的物語（読物）として山名氏を捉えるなら「山名豊国」を第一とし山名時氏、山名宗全の三人が小説的題材に事欠かぬ人物と仰言る。この度は、守護の権威失墜の戦国争乱の中で、因幡十八代守護の豊国公がどのように人間性を発揮したかを描いて頂きました。

歌聖藤原俊成、定家卿を祖とする「和歌の家」として八〇〇年の伝統と膨大な国宝、重要文化財級の有形無形の家宝を今日まで守り続けた冷泉家のご当主。冷泉先生は、山本茂信氏のご縁で、教育と冷泉家至宝展開催中の超ご多忙の中を、さわやかなお人柄を偲ばせる一文をお寄せ下さいました。

四号発行のため協力いただいた執筆者の先生始め皆様に深く感謝申し上げ次の五号のより充実を期する所存です。

山名　第四号

平成十年三月発行

編集発行

全国山名一族会
山名史料調査研究会
会長　山名　章
〒156-0044 東京都世田谷区赤堤五丁目四番九号
TEL・FAX〇三(三三三一八)三七六九

編集委員　山名弘宰
宮田靖國
山名年浩
山名源太郎
山田利春

印刷　富士印刷株式会社

無断転載禁じます

山名氏史料調査研究会刊行　　平成10年３月　　第４号